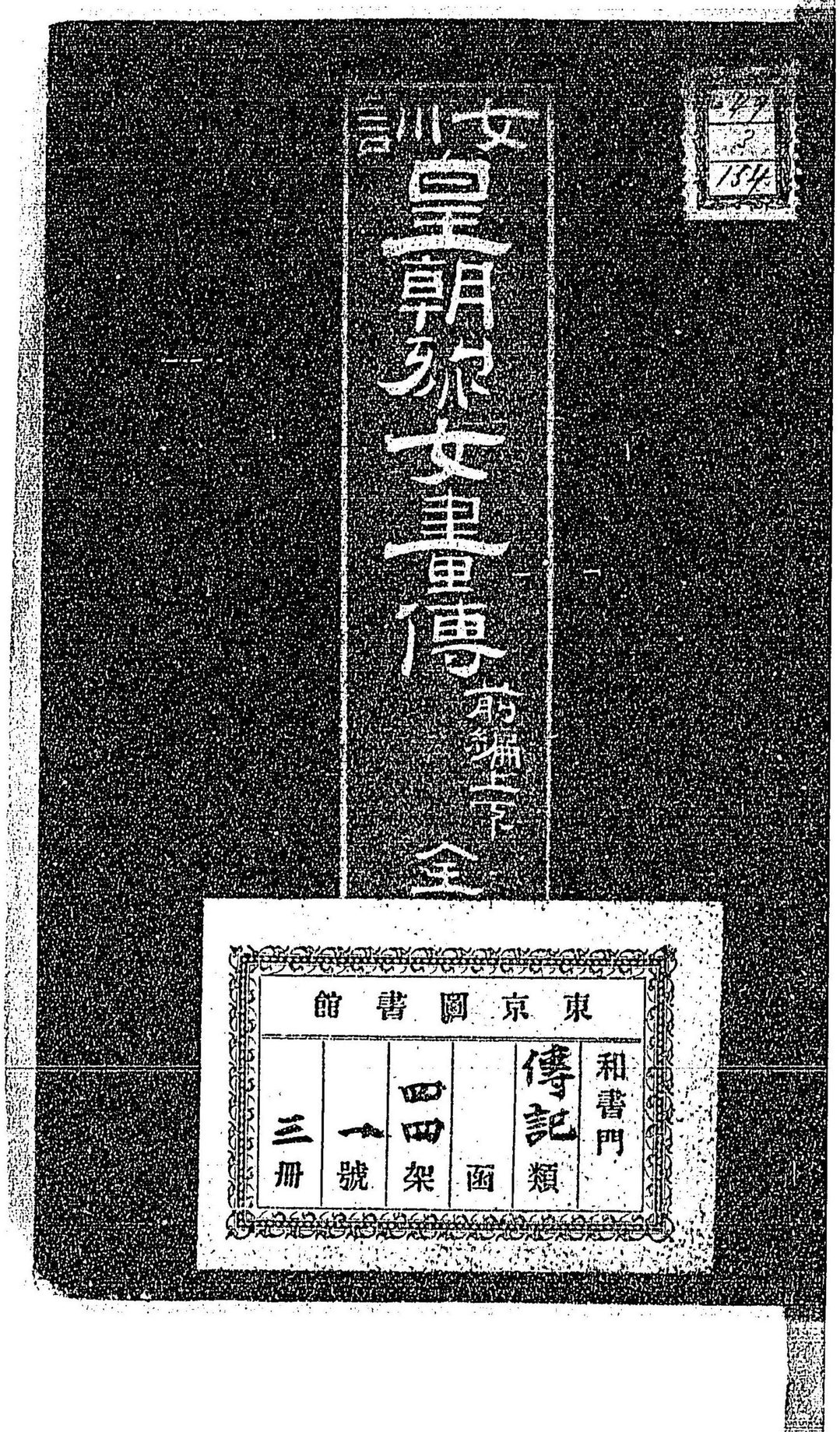


004399−001−9

特21−434

「女訓皇朝烈女伝」

源鸞岳／著

M17

ACE−0891

特21
434

吉林省圖書館藏

皇朝列女傳序

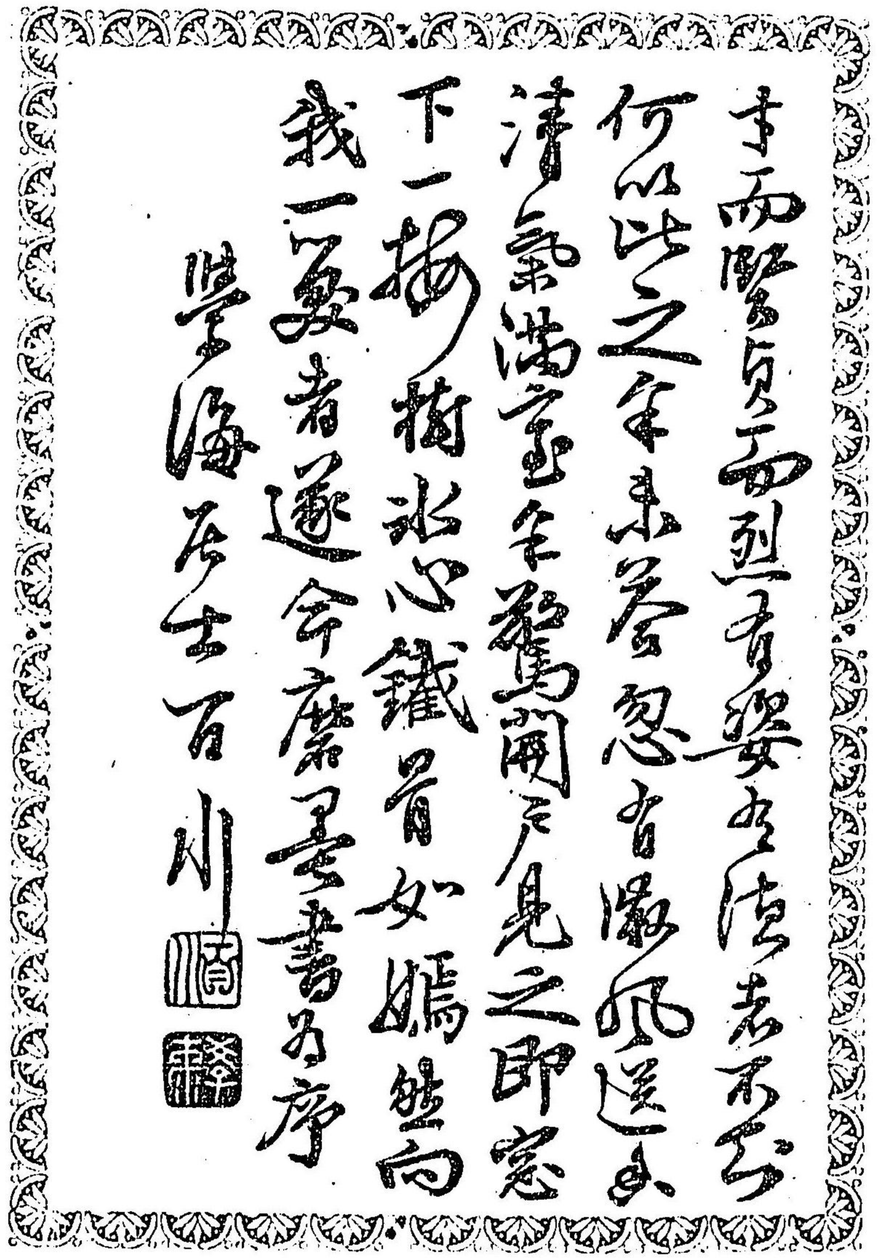
甲申首春余讀書於墨上別墅亂抽書帙偶獲百花園閱之會有蒙源善岳所著皇朝列女傳諸余一言者余試舉書中所載賢女淑媛比之百花謂其宜姿絕代氣格高雅者櫻花也其清艷幽靜

玉映珠溫若李花也甚色淡氣清
殊有野趣若桃花中梨花之於艷
淡白者花之婦德也並可以節
操之士亦儀表矣若夫
牡丹之濃艷妖冶可國色者
古世也蓮花之亭亭出水不纖污
泥者貞女也菊花之高潔閑雅不

與百卉同其盛衰者豈非賢婦乎
冬傑之冷艷冰骨不畏霜雪
所操者豈非烈婦乎其他如海
棠玉蘭山茶芍藥蜀葵薇花稻
莫不可比擬者爲則列女傳是
一幅百女圖也坐右小屏頗解
文字笑曰先生之言是矣然則

訓皇朝烈女画傳之序

余拙女と教諭をるゝ孝經四書曹大家れ女戒及女大學婦人養艸の類を授て婦女の德と養ひしむ源氏伊勢物語ハ淫佚と述さる者なれバ婦德と養ふの書ゝ似もと先哲の誡めらるされバ此二書ハ絶て讀しめを或時讀書終而拙女乃余ゝ請々るハ吾朝往古より貞節の婦女多く有べし書集めて見せ給へゝしといへる故貞婦乃言行を探り求るに往古ハ史ゝ存をるも乃稀へ因て本朝通記盛衰記曽我物語義經記前々太平記三楠實錄和國新女鑑明良洪範真田三代記兵家茶話駿臺雜話鳩巣逸話諸家高名記永錄貞婦鑑接戰實錄續人名武勇集稲葉泰應譜



略稍軒小録其外小説ゑの數本ゑ從ふて編集を垂仁天皇の比
より尊保の比迄の吉行乃稱ゑ存をるゑのを撰或ゐ鄙語れ口
碑に殘れるも其實なる者ば摘撮ゐく。六卷となし拙女ゐ授く。
亦婦德と養ふ乃一助ともおらん哉假令ば神功皇后の英武ゐ
く。三韓を服從し給ひ橘姫れ日本武尊ゑ代りて海中ゑ投ず給
ふの類ゐ世人乃知る處ゐきば是を記さを。又本朝烈女傳を見
るゑ光明后れ千人の垢と浴し給ふ事ゐど載さり其餘も劉向
の撰とゐ結構大に異ゐれば是と採を。和國新女鑑ゑ鎌倉尼將
軍を載さり其才略傑出ゐ共承久の亂ゑ義時と相議し後鳥
羽院を隱岐國へ流し奉れり縱君無道へとも臣子の職ゑ志く

暴逆れ樣に思ひるゑと縉紳家れ論もあれば是をとらを姫鑑
といへる書あり和歌者流の賢姫多く教訓ともおるべき事ゑ
何ぞども貞烈の言行ゐ稀ゐり婦人ゐ柔順を尊むゆへ是を蠟
ふく乃せをと見へたり然れば劉氏の撰にゐ貞烈剛健れ婦女
と載せさり柔順ゐるゐ婦人平常の行ひへ戰國將士の婦女と
しく危難傾覆ゑ逢ひ心弱りくも節義と欠ゐば日比の婦行と
言に足ろを古へより衛の共姜と始めとゐく歷代貞節乃女世
ゑ絶を漢の陳孝が婦魏れ令女が如きと以く見るべし令女が
曰仁者ゐ盛衰とどく節義と改ず義者ゐ存亡を以く心と易
ずと云り婦人ゐ激烈の言葉へ余が撰をる意ゐ令女が言ゑ

本づきて劉氏の撰に倣へり。縦令へば女義の行ひあるゐ松下禪尼佐竹義高の夫人の如き、仁智あるゐ土肥實平が妻真田信之の夫人乃如きへ貞順あるゐ春日局安藝が妹淺岡が如き是へ節義あるゐ源渡が妻細川忠興の夫人れ如き是へ辯通なるゐ緋子局強子局れ如き是なり。其餘れ數女ゐ是ゑあらへり。劉氏が撰ふ孽嬖傳あり夏末喜殷末紂已と始とし惡惡の女數人あり定て婦女子の鑒誡ゑ記せし者あらんゑ吾朝ふゐ斯の如き殘忍暴惡乃婦人ゐ絶く傳記せず漸く後鳥羽院の亀菊が長舌より大亂の起れる事其外二三女ゑ過ぎ依く爰ふ記さず只美ゐ婦德ならん女の言行れ傳ゐちざるころ遺憾へ篇と分て書ざるゐ其人物の乏敷ゲ故へ因て一列ゑ編せり。讀者是を察すべし。又高妃貴妾乃中へ娼妓賤女を舉る事ゐ憚るふ似たゑども其貞操の高傑なるゑ至りてゐ貴賤高下の差別ゐなき樣ゑ思ひよりて等ゑく舉く。其德操を顯揚せり。余や拙劣寡聞ゑ之バ賢婦れ德行ふ於て定めて脱漏せし事も多からん。後拾の詳補する事もあらバ幸ひあらむ。讀もの文章の拙き状ゑ以て數女の德操を廢する事なかき。

亨和辛酉夏五月

源鸞岳松隱館に誌ル

緒言

一此書ハ。故源鶯岳翁。家女の庭訓ヨ。編纂せられし者ヨして。松平其寶庫ヲ秘め置れしと。借覧するを得て。印刷ヲ附する者なり。

一編中。編者の名。前編ヨ普岳と有り。後編ヲ鶯岳と有り。何ヨも同人ならん歟。識者の判定を待つ。

一文中熟語及假名等。往々解せざる所有り。流傳の久しき恐らくハ謄寫の誤ならん歟。然共編者の素志ヨ違ハん事と恐れ。濫りヲ校正と加へゼ。本編ハ其謄本ヲ依り印刷せし者なれバ。識者の明察を乞ハん而已。

一此書ハ享和年中の編纂ヨ係るを以て。續編以下。德川時代ヲ

至りては當時の將軍位貴び。文中。上樣或は神祖。大神君。烈祖大樹。台廟。猷廟。嚴廟等乃尊稱多し。又幕府と推尊をるの餘り。聊ら事實と違ふ者有ると覺ふと雖ども。故人の編輯せし者なれば。是亦濫りと改正せも。故ふ近時の婦女子は。時勢乃變遷すると以て。其文意の解せざる事多からん。因て粗注釋を加ふ。又熟語の振假名等は。只童蒙の讀易らん爲と。普通の傍訓を施せし者なれば。定て誤謬有る可し。

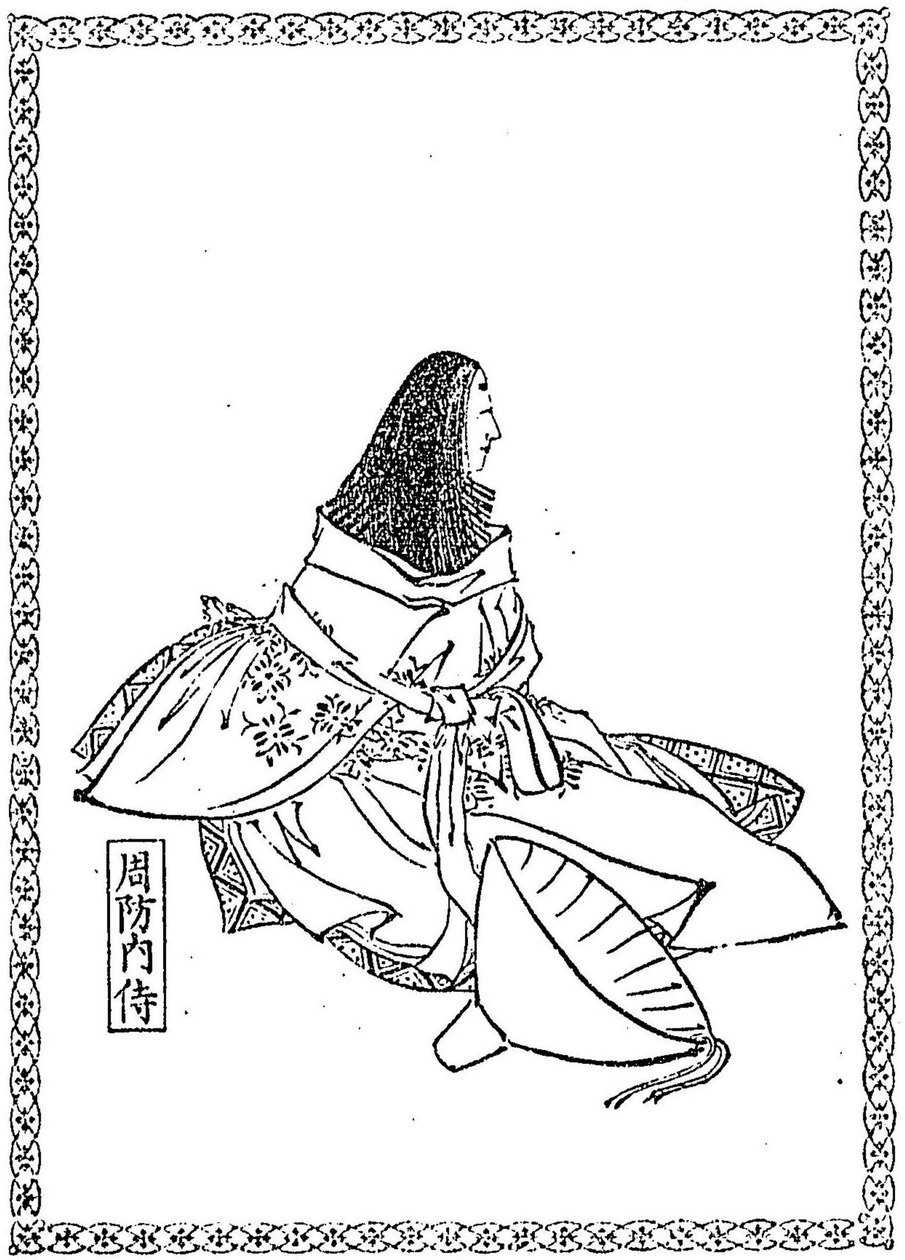
一畫像は校正者と。繡繪者とに。想像ふ出でし者なれば。恐らく其肖像と。違ふ事有べし。此は看官の大恕を乞ふ。

明治十七年一月

中村頼治誌

上野寛永寺入

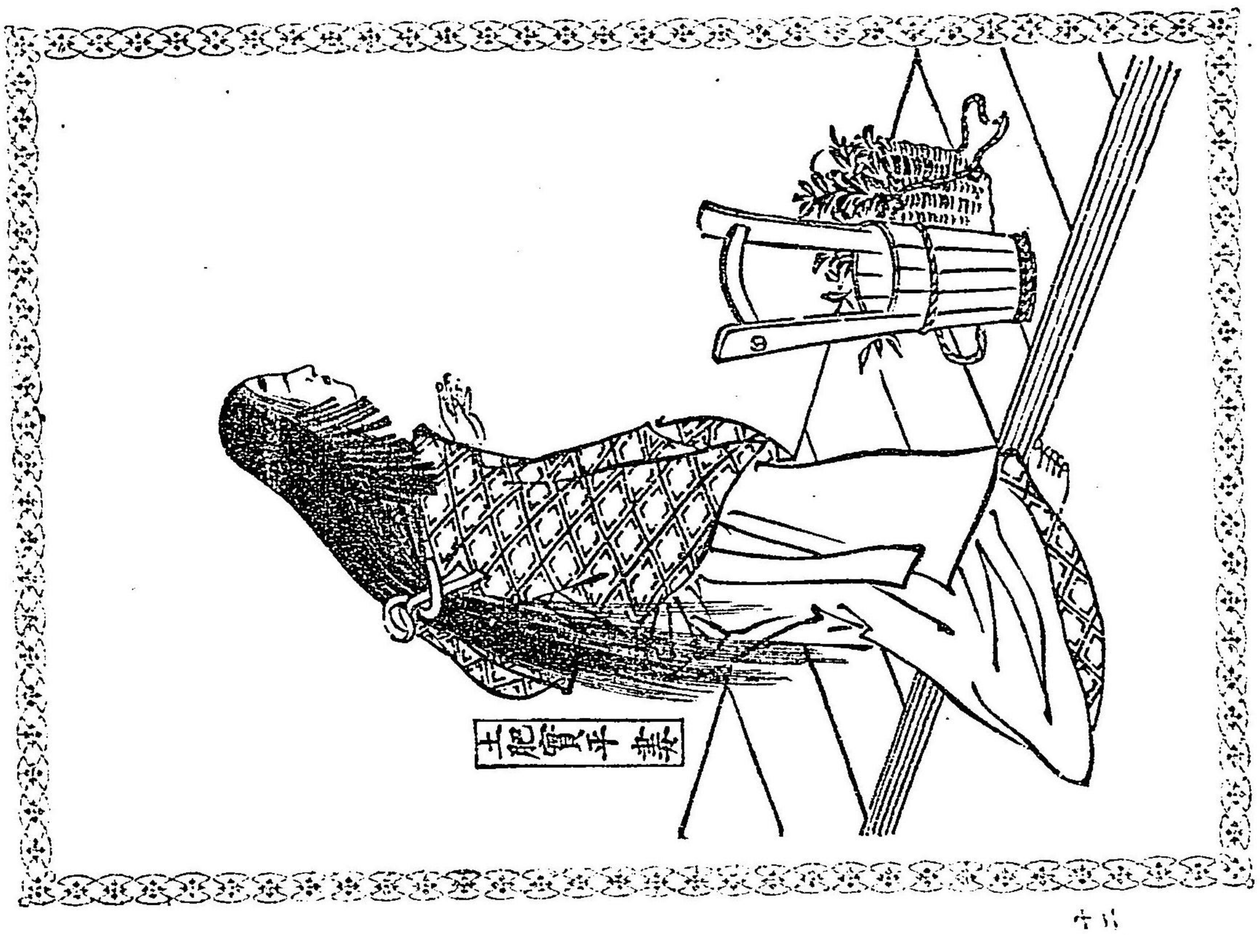
寛永寺

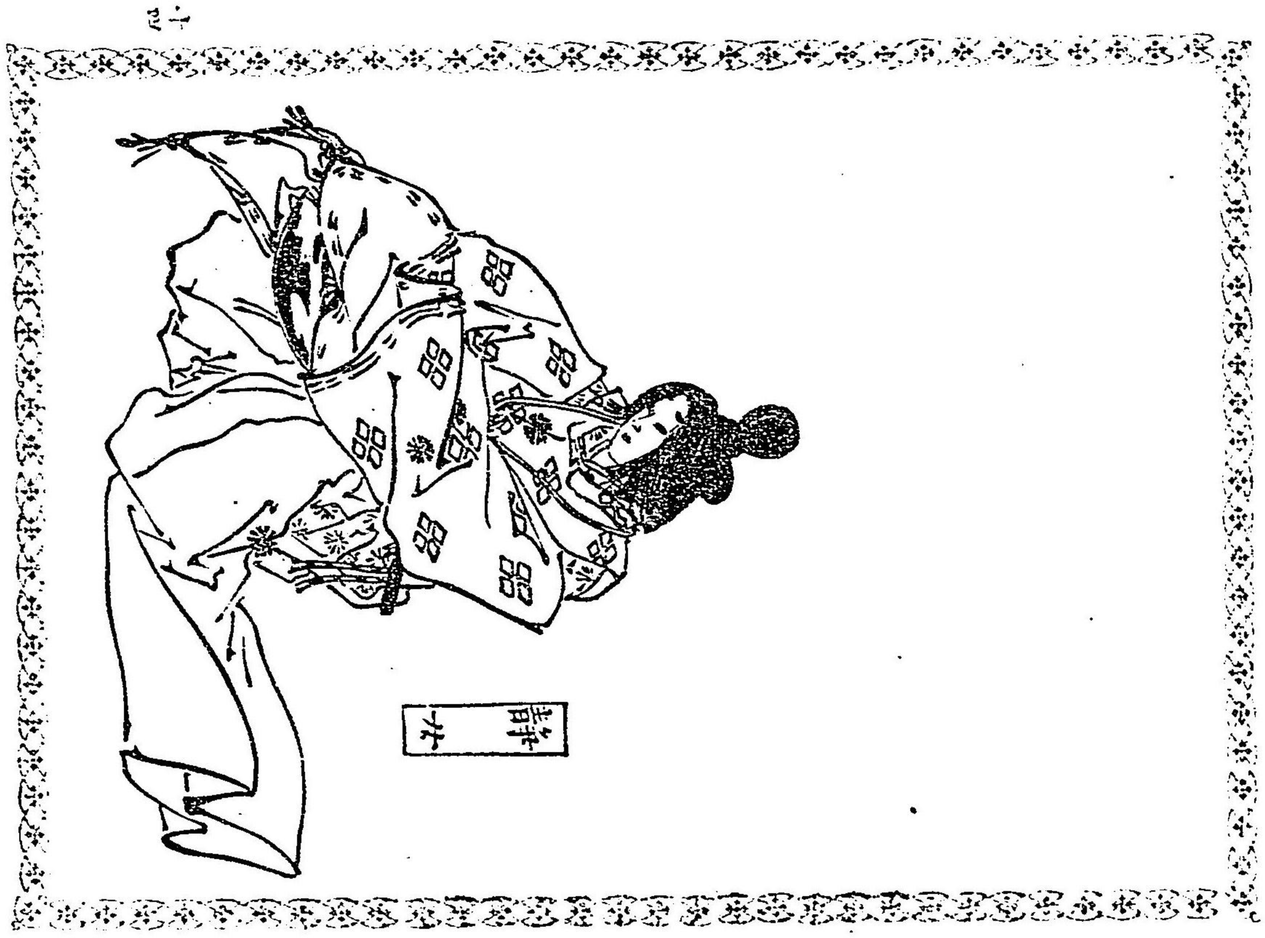


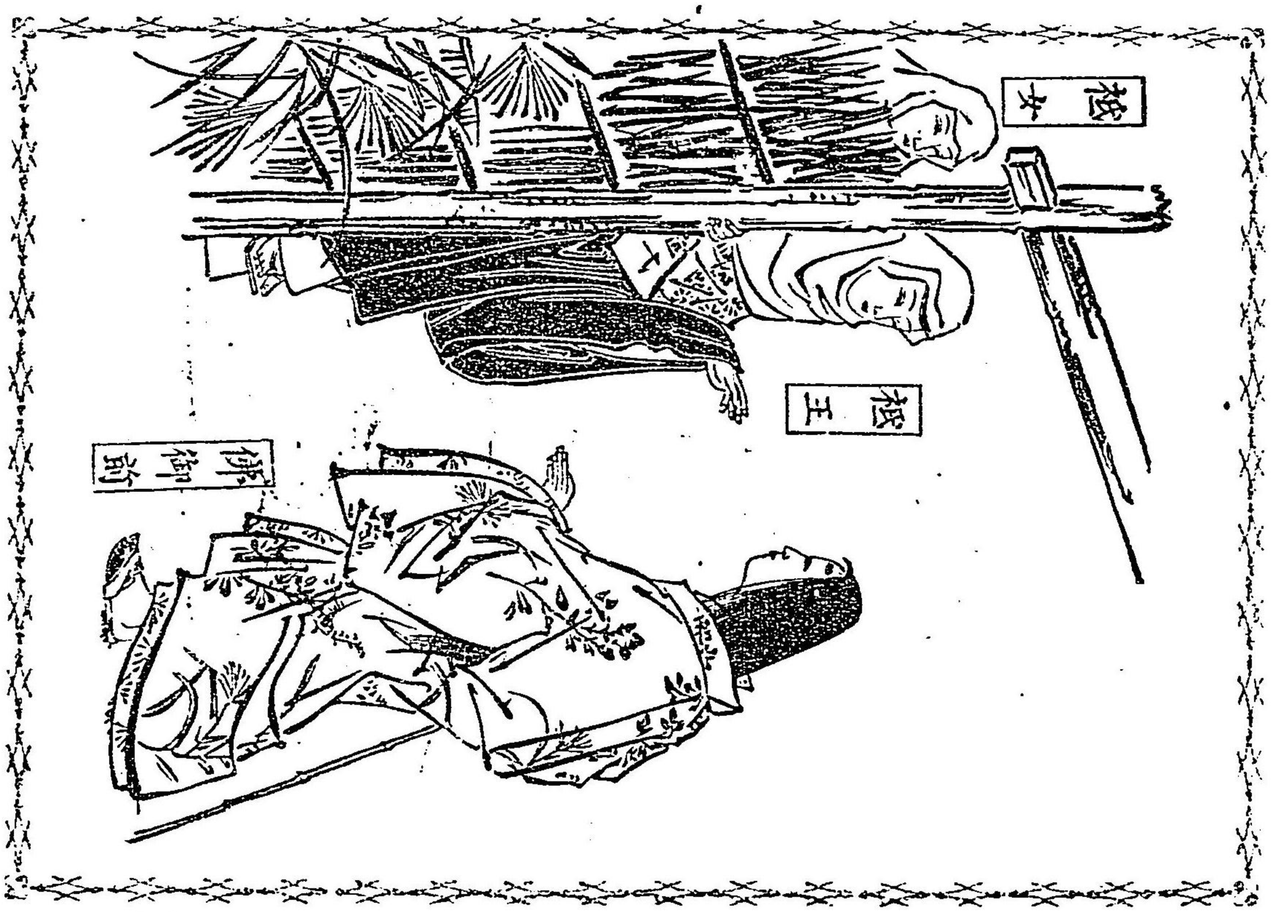
周防内侍

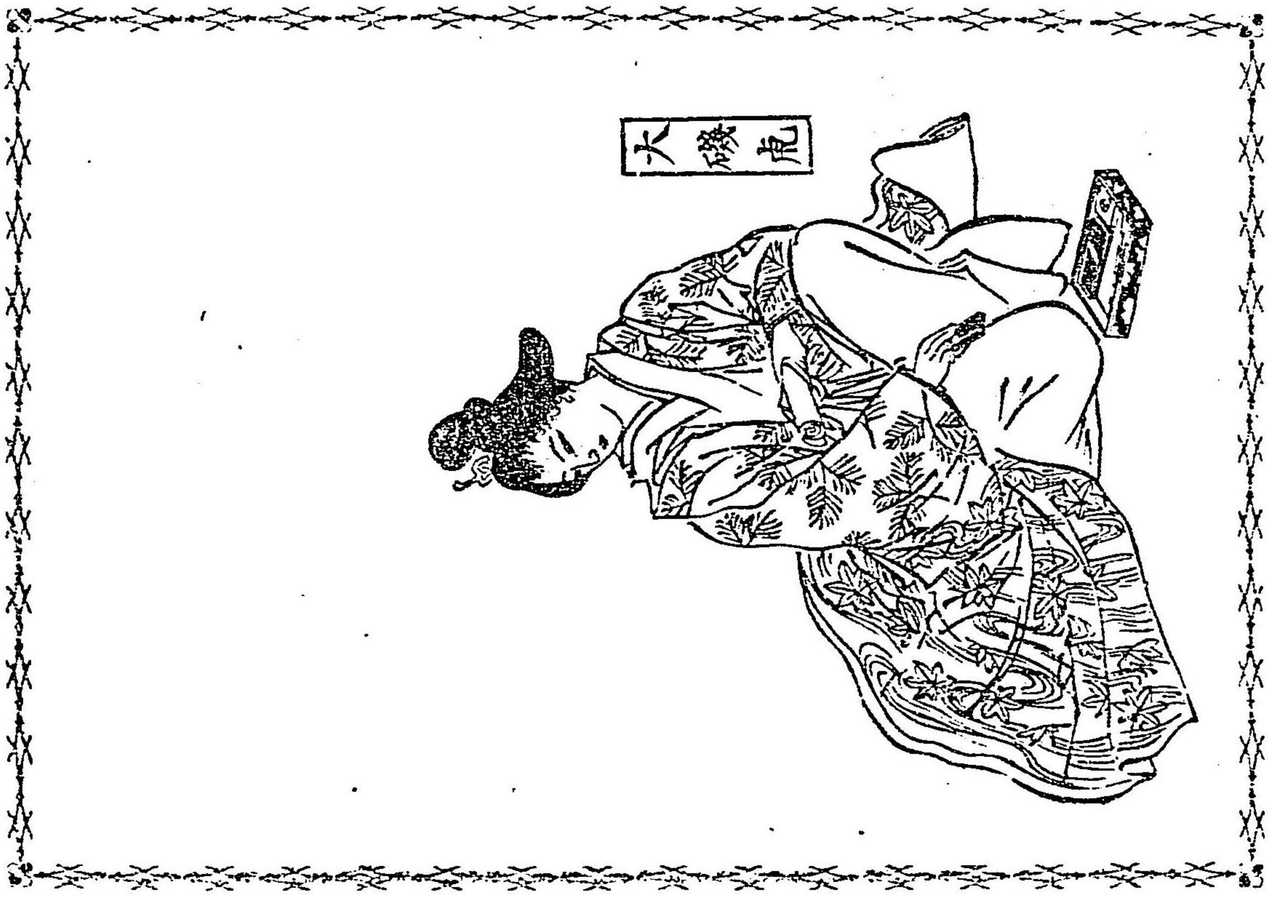
秦傳藏妻

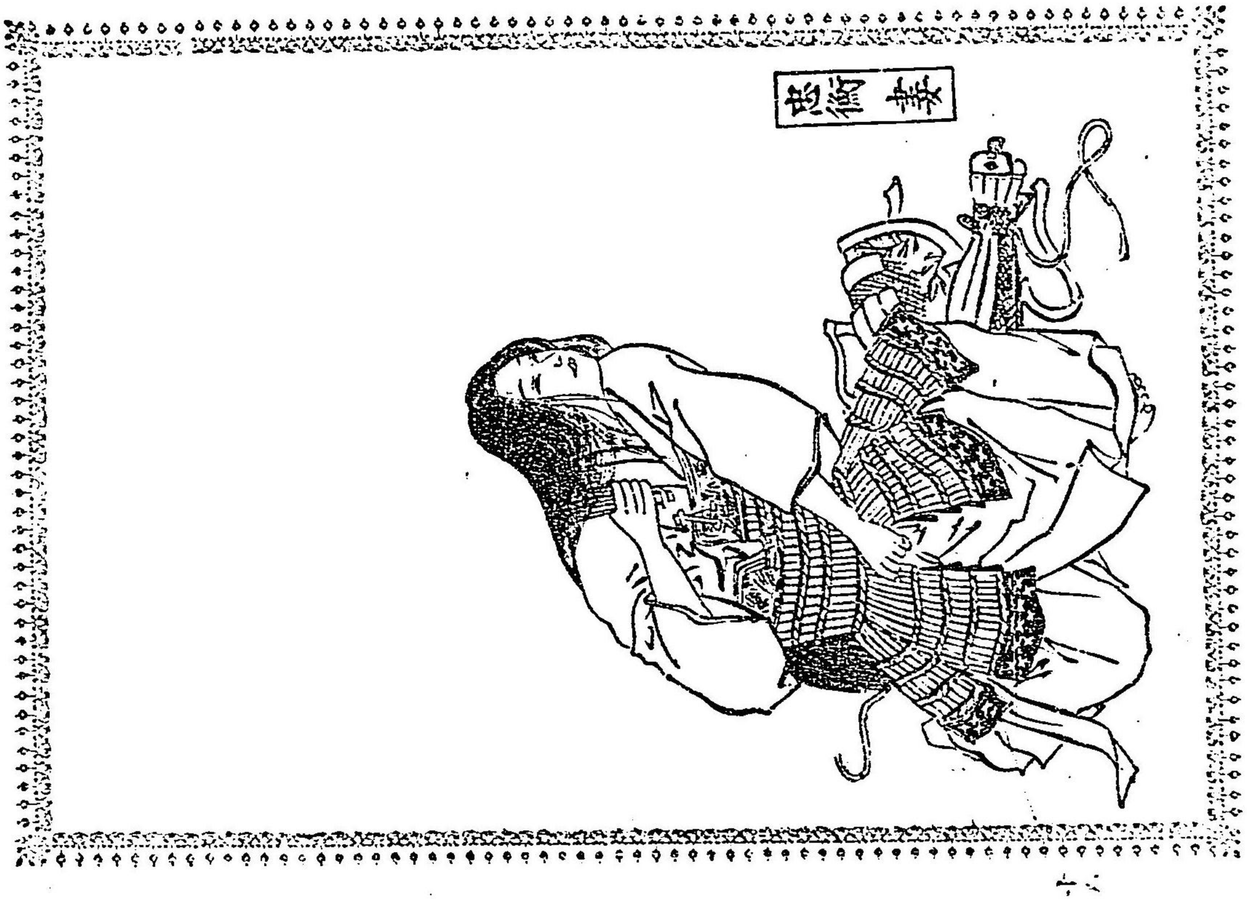
源渡辺綱


坂田金時


侍女


侍女
侍王
侍衛武士


火磚虎


鉄衝虎

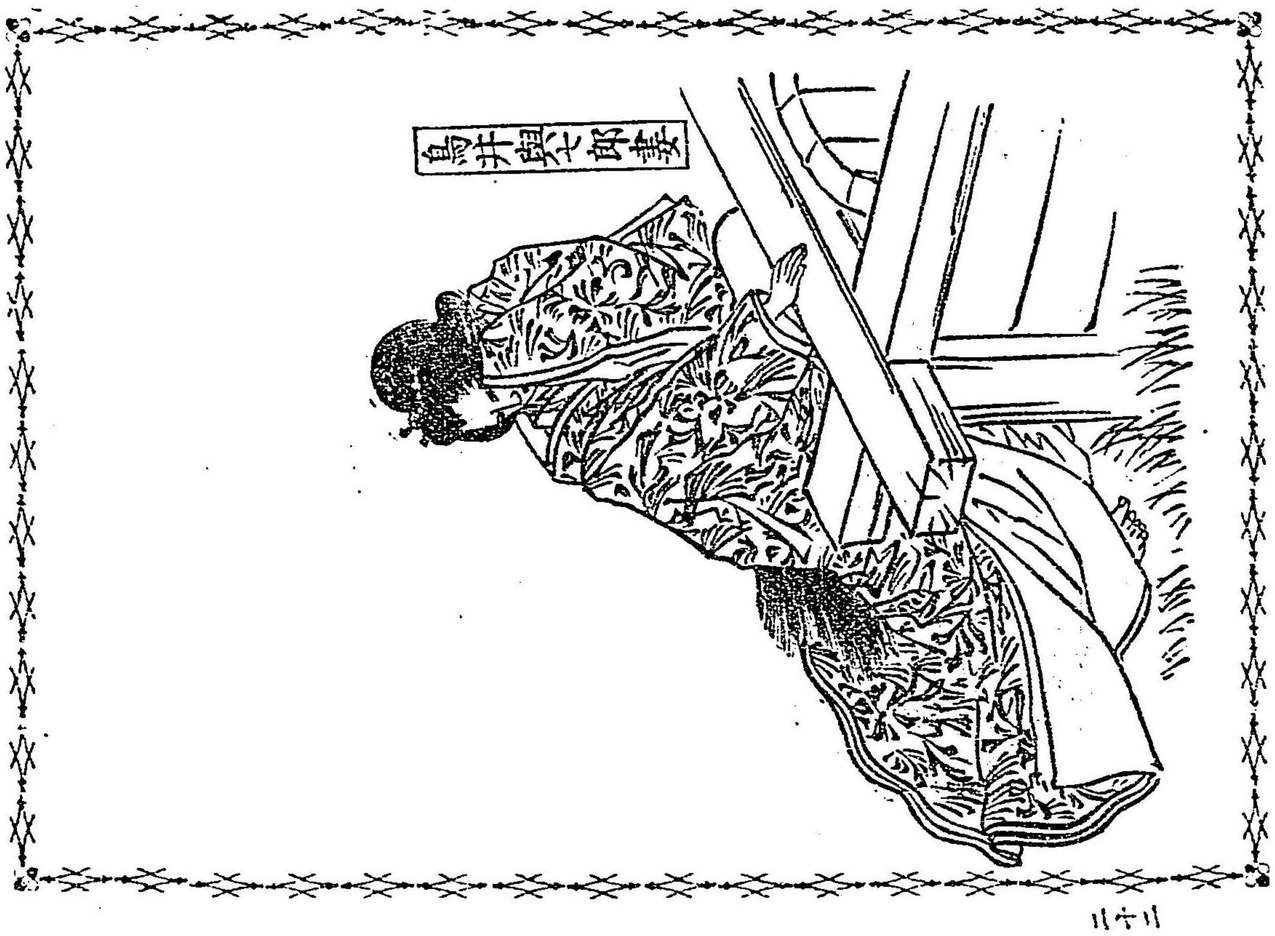
松下禪尼

補世尺母
補正行

瓜生保母

那須五郎母

奈良屋清兵衛


島井宗七郎妻

女訓 皇朝烈女傳卷之上目錄

○狹穗姫　二十六丁
○馬飼歌依が妻　三十丁
○上野形名が夫人　三十二丁
○周防の内侍　三十四丁
○秦傳三が妻玉笛　三十六丁
○源渡が妻袈裟　四十七丁
○土肥次郎實平が妻　五十丁

女訓 皇朝烈女傳卷之下目錄

○妓王妓女佛女　五十五丁
○源廷尉の妾靜女　六十二丁

○大磯れ虎女　六十六丁
○和泉三郎忠衡乃妻　六十九丁
○松下の禪尼　七十一丁
○楠帯刀れ母　七十三丁
○那須五郎の母　七十五丁
○瓜生判官が母　七十七丁
○奈良左近れ妹　七十八丁
○鳥井與七郎が妻　八十一丁
○武田勝頼の夫人　八十三丁

訓 皇朝烈女傳巻之上下目録終

訓 皇朝烈女傳巻之上

菅丘源齋岳撰

○狹穂姫

狹穂姫ハ。垂仁天皇れ皇后ニ。兄と狹穂彦といふ。外戚の故を以て。權勢盛んニして。驕奢度おく。遂ふ反逆の志あり。或時私ふ后ニ語りて云。汝兄と夫と孰れと愛をるや。皇后其意と知らず答云。兄を親愛をる事切ニ。爰ニ於て。狹穂彦衣中より。短刀と出して。后ニ授けて云。夫女を色として人ニ事ふるもれニ。色衰ふる時ハ。寵も又衰ふ。今天下ふ美人多し。定めて盛ニ進んで愛寵と得るもれ多からん。然れバ。汝が寵一旦ふ衰ん。

事ハ目前なり。汝我が爲ゐ天皇と絍せよ。我天位ニ登らべ。汝と共ゐ天下ニ照臨し。枕と高ふゐ永く百年伏樂ん事。豈快からぢや。后心中大ゐ驚くといへども。兄が志し既ニ決せり。諫むべからざる事を知り。其短刀と受て。衣中ゐ隠し。時を得て兄と諫んと思ひ。其座伏起て退く。其後帝高岡ゐ居給ひ。皇后の膝と枕として眠り給ふ。皇后心中ゐ。兄れ謀ー事ハ此時おらんと思ひ。夕れば。涙流れて。帝れ御顔ゐ戀る。帝驚き寤后ゐ語り。給ふハ。朕夢ゐ錦色乃小蛇朕が頭と纏へり。又大雨ふり。朕が面と濡せり。是不詳乃夢ならん。皇后大ゐ恐惶ー。地ニ伏て。兄乃反逆を奏ー奉り。妾兄れ志ゐ違ふ事能ゐぢ。又天皇れ恩ゐ背く事と得ぢ。是と告る時ハ兄を亡ー。告ざる時ハ天位伏危くし。社稷を傾けん。妾が進退爰ニ窮る。依て密ゐ血流するのミなり。君妾が膝と枕として眠り給ふ。爰ニ於て思ふゐ。若暴逆れ者ありて。兄れ志を謀るおらむ。此時ならんと思ひ。夕れば涙頻りニ流れて。御顔と沾せり。錦色れ蛇ハ。授けし短刀ならん。大雨ハ妾が涙おらんと。涕泣ー夕れむ。天皇宣ふゐ。是汝が罪ニあらぢ。兄が惡逆ニ。と即上野ハ綱四に命じて。兵ゐ將として。狭穂彦と征伐せーむ。狭穂彦城守志て防ぎ戦ふ。城固くして月を踰て降らぢ。爰に於て皇后。悲泣おいふ。妾兄と亡ーて何れ面目有て。天下ゐ蒞んやと。則皇子と抱き走りて。兄と共ニ死せんとハ。天皇軍士を増おて。城と圍み。城中ゐ勅して。皇后と皇子を出をべし。然らざれ火と放ちて此城を焼失んと。皇后是を聞て皇子と抱きて。城上より官軍ニいふ。我皇子と抱て此城ニ入事ハ。皇子ハ依りて。兄の罪を宥められん事と願ふのミ。然るニ城を圍む事倍々倍せり。妾も又科遁れ難し。妾死ハといへども。天皇れ厚恩忘るべからら

せと。遂ふ城ふ歸り。兄と共ふ自殺ほ。官軍皆哀惜せり。

本朝通記ふ。長定宗云。皇后恭謹ふ〜。婦道を守れり。兄れ逆心ほ知りて。天下乃爲ふ其謀を奏し。兄乃爲ふ死と共ふほ。忠敬れ道を全くせり。貞女といふべし。云云。惜哉。苟も兄れ命を救ゑんとならむ。初天皇ふ奏し。懇く願ひを許諾し給いぎ。社稷乃大事を告奉るべし。天皇許諾有ん事必せり。爰ふ於て。其約を堅くして。兄れ反逆乃狀を告。助命を乞ふば。其誅をも免るべし。其慮り爰ふ及ぎ。兄妹共ふ死亡す。嗚呼。千歲れ下ふ於て悲むべしと。按ぎるふ確論ふ。後世縉紳先生。是非降生せり。皆紙上れ空論なり。古は遥ふ。昨と勢と知り難けれども。貞烈れ風標然たり。古人云非二死者難一ふ。處レ死者難し。蓋狹穗姫乃謂なり。

○馬飼歌依が妻

歌依ね。欽明天皇の御宇ふ。察れ御馬飼ふして。忠節私ふし。天皇是とよみし給ひて。位階も高く進けると。或人是と妬みて。天皇ふ讒奏し〜る。歌依が妻は。其姿うるわしく飾れり。能々見るふ。たけといと姫乃皇后れ御帶と身ふ纏へりといふ。天皇逆鱗ましく〜。歌依弑廷尉ふ下し。拷問するふ。皇后乃帶と盗たりと強責々れば。歌依苦ふ絶ぎ。我御帶と盗ぎ。是讒者乃成せる業なり。若誠ふ盗さらば。我天の禍ひと蒙らんとて。遂ふ責殺され〜り。死ぎて一時も過ざるふ。廷尉の軒より。火燃出盛んに。獄吏其子を捉ぎて。ふるせのひと兄弟と捕へて火中へ投入れんとぎ。妻走り來りていふ。我子罪なきふ燒殺し給いぎ。大なる禍ひ有べし。直成政を以て行ひ給へ。若強く殺さんとならば。此幼子のと殺ぎて。兄と助け候へ。

父が形身とも思んと大ゐ叫びしゝば。廷尉がいふ。人皆年たけたる子より。幼きを憐む事。人情なり。汝いうな是ば幼を捨て兄を惜い不審へ。母れいふ。幼き者い自らが産し子へ。兄い先乃母れ産て身まうりぬ。再び妻と迎へ。兄を預て育いしむ。今繼子を捨て。我子を助けゐば。若れ下より。母怨や恨みつべき。夫も叶ひぬば。我も供ま殺し給ふべしと。泣倒ま々る。此由天皇ま奏聞しなれば。天皇大ゐ感ず給ひて。兄弟共ま赦され。御馬飼の姓元乃如くゑり去と。なるせま被下ける。其讒言せしゑれ顯已ま。其者罪ま行ゐいれける。母が志し乃切なるま依て。死を逃れ再度家と興しなるよし。人皆感歎せり

野史子云。歌依が忠臣まゑ。如此罪を蒙り獄ま下りて責殺されぬる事後世ま於て深く嘆歎せり。大史公が天道い是邪非邪を疑ひしも。虚ならぬ。此妻れ貞操なくんば。何を以て其罪を明めんや。是を以て是を觀ぬるゐ。天道與二善人一といへるも。誠ま誣となさず。

○上野形名が夫人

上野形名が夫人い。葦氏れ末へ。舒明天皇九年ま。甲陽の強賊王命ま叛きて。貢物奉らぬ。隣國ば犯し奪ひ。我意と振へり。天皇逆鱗し給ひて。上野形名と大將軍ゐ命じて。逆賊を追討せしむ。形名が夫人は。賢ま〻し〻。智略あり。夫ま從ふ〻陣中ま居れり。形名斥候を去て敵城を見せしむるゐ賊堅固ふし〻。輒くい責拔がさし。依て向ひ城を築〻攻戰ふ賊兵勢ひ猛ま〻し〻。官軍彌々敗走去て。士卒次第ま逃去る。將軍寡兵ゐおり。氣力盡て。日れ暮ば待て引退らんとを。夫人諫め〻いふ。君い代々勇名高し。新羅百濟といへども。萬里の波濤を凌ぎて。攻靡け降伏せし

む。今将軍ゟ至り。又大将軍の宣旨と蒙むり給ひ。此逆賊を討しむ然る
ゟ敵軍強勇ゟ〳〵利ならも。士卒悉く散亡を。君又落給はゞ。先祖の
武名を汚し。後代れ嘲を蒙り給はん事。口惜れ事ゝ。君死を決し、弓れ弦
れ有ん限り。矢種乃あらん程は接戦し。いれ和い盡おゞ。心よく戦死し。君
恩に謝し給へ。妾も供ゟ死を同ふ〳〵候はんと。酒と勧め。いざ軍し給へと。必
死を示しける。形名も是ゟ氣と勵まされ。鉾を取て出んとは。夫人は侍女
三十人ゟ令ゝて。弓を取〳〵敵ゟ向ひ進む。賊兵是を見〳〵。謀計ならんと疑
ふて敢〳〵進まも。敵軍れ動揺もる形容と見〳〵。夫人敗兵を集めて突出る。
士卒勇氣百倍ゝ〳〵。賊軍ゟ突て入。縦横ゟ血戦し。敵兵大ゟ散亂ゝ〳〵。
逃れ走る。官軍追討し〳〵其魁将を獲さり。因〳〵甲陽平治は。形名が功
名天下ゟ振ふれ。此夫人の勇略ゟよるべかり。

夫人れ智謀古今ゟ傑出せり。官軍不利ゟし〳〵勇氣挽〳〵計乃策盡
る時ゟ臨み〳〵。夫人ひとり諸軍ゟ必死と示して。勢ひ再び振ふ事を得て。
終に大勝と得さり。兵書ゟ陷二之死地一而後生。置二之亡地一而
後存。と蓋此れ謂なり。

○周防乃内侍

右近之介といふ。女房ありしが。内裏ゟ仕へ〳〵。周防れ國司と契り。一人
乃娘を産り。此娘生長するゟ從ひ。容貌美麗ゟし〳〵。心さし賤らを。世ゟ
周防れ内侍といへり。詩歌れ道に委ゝ。孝心深く。神佛と敬ひ。尊びけ
る。此娘二十歳れ夏とりや、母れ右近之介病と得〳〵漸々重り人面へ
出べ死様なし。里ゟ出て医を求め療治をれども驗なし。大内れ御歌合ゟ
どれ折節ゟゝ〳〵。此人あらでい事たらを思し召。女御乃御方よりは御消

息毎々おれども叶はむ。月日もかさおりゆけども。快癒もあらねば。大和國初瀬寺に觀音こそ斯る病と治し給ふと聞傳へ。初瀬ふ詣で。七日籠りけれ共其驗なく歎さおはしを中ふ。淨土に巫女と〻。占に上手有りしが。是ゴ問々るゴ。貴船に社へ七日に夜。丑の時ふ詣でるおらば。奇特あらんといひしふ依〻。是偏へゴ觀音の御告ふらんと大に悦び。母の代參ゴ。内侍に只獨り。遥の山路を。いと物凄き丑の刻ふ。貴船の社ゴ詣で。深く祈念とおし。南無や貴船大明神。願はくは大度の慈悲を垂給ひ。母の病と愈しまさび給へと。丹誠を凝し伏拜み。程おく淵つる夜。靈驗あらさの告と蒙り。内侍に大ふ悦び。我家ゴ歸り〻。如意輪觀音と作り。僧と請じ〻祈りしかば。母の病ひ忽ちゴ愈〻。元の如く内侍ゴ〻仕へ奉りけり。孝行の德故。今の世迄も。周防の内侍と。其名高かりし故の觀音に。清水寺の興の院ふ安じ奉り。當代まで三つの病と諸る人。此觀音を祈るふ。必ず癒し給ふとぞや。（釋の法恩が撰る續人名の中ふ見へさり奇談おる處に略之）

按ゴ。此僧を縉紳家乃論ゴに。餘り奇談おる故。妄語おらんと疑へり。予に暫く置く論せむ。予が取處に内侍乃孝心天ゴ感應する處と以〻。世ふ後るゝの婦女子の教への一助とも成ん歟。孝を百行の本ゑといへり。人皆孝心ある時を。何ゴの神も請ざらんや。夫神に聰明正直ゴおて。一おるものゑ。古語ゴも見へたる。周防の内侍が孝心神明も感應し給ひけり。孝經曰孝子之至通神明光於四海亡所不暨。此周防内侍が謂へ

○秦傅三が妻玉笛

弘仁年中山州嵯峨の邊りに泰の兵治と云ふ人乃有始に武士おりけるが。此處に世を逃れ〳〵隠れ住り。其子を傅三といふ。五歳の秋卒せり妻に廿三才になりしが。近隣のも乃共。再び嫁せん事と勧むれども。此妻合点せず。紡績機織とて。傅三と養ひしふ。傅三も十九才ふおりて。極め〳〵孝心深く。母に孝養を盡し。諸家に備れ物書て。貧家の孝養他に異こしが。母傅三といふ様に。其方備書をして。親子のすぎはひ漸々にを義式守れども。其方後嗣なき。因て婚嫁を求むれども家貧なれば。誰ら嫁と許さものあらんや。我甚だ是を憂ふ。傅三いふ。我一人の力ふ〳〵も。尊母を養ふ事にいと安し。妻を娶る事は遲らるまじ。又妻を得たりとも。其女尊母に對し不順なる時に却て不孝の端おらん歟。母此言を

聞て。其孝心を悦ぶといへども。猶婦を迎へん事を思ひ。或日齋戒沐浴して。亡父の靈前に向ひ泪を流していひけるに。妾節義式守る事既に十四年に及べり。更に變心なし。神靈に向て。一毫も秘る事なし。妾只今兩様れ所願あり。神靈是を鑑み給ひて。占に因て明らに告給ふべし。妾節を守り寡にて身終る歟。又改めて嫁すべき歟。妾再緣を望むにあらず。許し給へ。身を費。其資料を以て。一子に婦を娶るべ紀志願あり。是偏に亡父の御爲にして。後嗣あらしめん。孝子の爲にも其貧究式をくはんと。信心と凝し。錢を擲て占々るに。果して嫁を占に當れり。然れ共猶一決せず。又占ふに同じければ。心中落着して。密に人を頼み。妾に身を費ん事と求めるに。諸人本より其貞心を知り。殊に容色も宜しければ諸方より是を求めける。傅三是式聞て。泪を流していひるに。小子奉養足らざるに

寄りて。今迄れ貞節を空しくし給ふ事の口惜さよと。深く歎きタれバ。母のいふ。汝が言葉甚理ある事なれども。余が再緣をるい。深き志し有なればゞ。悔む事なられとゝ。近隣ヨ藤太夫とて。富家ヨゝ篤實廉直なる人あり。妻死ゑゝ後。鰥ヨゝ居る事年久しく。傳三が母ヨ銀三百兩と贈り是と迎へて妻とせり。傳三が母家を出る時。其銀を傳三ヨ與へ。箱に納め鍋を卸して其鍋を傳三ふ渡しゝいふ樣い。我六十日と過なバ。必ず歸りて汝に婚禮と調ふべし。夫迄い此箱は我ふ預けよ。傳三がいふ。我此銀を得るに益なし。鍋をも渡をべしといふ母色々其部拭いひ含め。涙泣して別れぬ。藤太夫が家に行しふ。其賢德あるヨ依て。一族童僕迄も皆悉く尊敬せり。既ふ兩月と經ゝ藤太夫ふいひタるい。妻再緣をる諫あり。妻が身を君ふ賣り。其銀ヨて小子ヨ娶と娶らせん爲ゝ。今暫く暇と賜るべし。家に歸りて。此事を計いんといふ。藤太夫是を感ず。幸ヨ梅津の里ヨ喜内といふ百姓あり。質朴なるものゝ。我年來圍碁の友にて能知れり。其娘拭玉笛と云容も宜敷。心も柔和ヨゝ。今年十七才ゝ。我娘ゑて婚禮拭調ふべしとゝ。即ち喜内に對面ゑゝ右乃趣旨と物語し。吉日を撰び。女を送らんと約しタれバ。妻大きふ悅び。家ヨ歸り。傳三と呼び。汝が婚儀調へりとて。先の娘と携へ來り。婚禮の事と辨ず。則婚儀も調へり。傳三妻と迎へゝ其愛しタまども。寐臥拭同ふせを。遂に半年を過されバ妻夫ヨ語りけるゝ。君妻と愛し給ふ事。他ヨ異ゝ。然れ共數月ふれども。枕拭同ふせを。何故れ事ヨや。包まを語り給ふべし。傳三いひタるい。不審尤乃事ゝ。其方れ心立甚だ我心ヨ叶へり。我心ふ快ゝらざる難事あり。先ふ其方と娶る銀い。皆我母れ身と賣りし銀なり。我是を願ヨをといへども。母

強く婚姻を勧めしより母れ心より逆ふ事と恐れ隨ひぬ。此銀を母ふ返し、其後快よく夫婦れ情をなすべし。夫迄い枕と同ふをるふ忍ひも。因く千慮と盡すといへども。其銀と謝ふる術もなく。空敷日と送れり。妻是と聞て泪と流し。扨も類なき孝行乃御心へ。只今夫婦の作業ゑて日と送るといふ。とも。此許多の銀と得ん事あらんや。妾身と終る迄獨居をるとも何いとはんや。傳三いふ。此銀と母へ返さゞる内は。我心曇をる事なし。其方事年若し。家ふ歸り別ふ嫁を求むべし。我全く是と恨むる事なしといふ。妻いふは。一度夫と持てより。外ゑ嫁を處かし。況や孝心感をるふ絶さりと。夫より妻は我家ゑ行き。母ゑその趣きを語りしゑ。父喜内更ふ信とせず。玉笛が伯父文内熟々と其由を聞て。我近隣の人ふ聞しゑ。傳三は母ゑ至つて孝心を盡を由へ。玉笛が親喜内は貧家なれば。如何ともし難く。伯父の文内は。我姪なれども。是又貞實なるを感賞して云。傳三は孝子へ。我姪は貞實へ。天道何ぞ此もの共と久敷困めんや。必も後榮有べし。我此事を調へんと。即時ゑ田畑を賣り。不日ゑ三百兩の銀と調へ。玉笛ゑ與へける。玉笛大きふ悦び。急ぎ夫の家ふ歸りしゑふ。折節傳三は留守故ふ。玉笛其銀の袋を。其儘座敷の卓れ上ふ置く。其身は臺所へ入りて家事を勤ずるふ。近隣の小熊隆閑といふ者あり。常ゑ惡事と業とを。壁の穴より是と伺ひ。密ふ入て此銀と盜み取る。傳三立歸りしのち。玉笛大ゑ悦び。急ぎ其銀と夫ゑ與へんと。行て見るふ。銀子紛失せり。大ふおどろ紀。夫ふ問ゑ曾て知らず。妻文内が實意有れ儘ゑ語りて。銀を爰ふ置しゑ紛失せり。傳三と深く隱せりと疑へり。傳三がいふ。其方伯父の家ゆさらおらば。銀と與ふまじき物ふえ非ず。然るゑ伯父も貧家へ甚疑はを紀事

へ、其方先れ吉葉と悔み、外人よ姦佞なる謀を教へられ、此難を我よい
ひ懸く。縁を切るべき手立あらん。我は誓て心變せぬ。何れ成とも心の儘
ふ嫁をべーと。大よ怒りなれば。玉笛も甚恨みて。定めて深く契り給ふ女
あり。我今れ銀子を持来りし故よ深く隠し給ふらん。此銀なき時ハ。
伯父ふ對しても面目なく又夫ふ捨られて。何樂きのあらんやと。且ハ恨
み且ハ悲しみて與よ入て自殺せんと。自ら縊れけるよ。天道信を感ぜる
故歟。繩切て落々れば。傍の人々驚き集り救ひ助けぬ。傳三も是を聞見て。
妻乃言葉偽りよあらぬ。必定他人の盗みよ違ハぬ。我孝心ハ空しくな
りし歟。天道恐るべし。七日が間よ盗賊露顕をる様よと。髪を亂し食を絶
て。閉籠をる神明よ訴ふ。然るよ二三日も過て。隣家れ小熊京都へ出る
とて。友人の家へ立寄しよ少年等酒と飲く居さりしよ。小熊も數盃と

傾け酔れ煮さるを食ひしよ。忽ち其毒ふ中り。腹痛狂亂をく倒れ伏し
人事と知らぬ。皆々驚き藥と與へ。腹と温め摩りて。胸と開きしよ。首ふ銀
子と入し袋懸く居り。座中れ人是と見て。小熊が此銀子は心得ぬ。日頃
傳三夫婦が銀失ふて。相爭ふと聞たり。衆人平生小熊と惡みければ其
腦み伏したるを幸に。密ふ傳三が方へ持ゆき見せければ。玉笛一目見く。
驚き悅び疑ひもおき我銀よしく。傳三も大よ悅び。先此銀ハ主よ預給
へ。我奉行所へ訴へく。其惡盗を正をべーとて。即時よ訴へければ。兩人
召呼れ。究問せられしよ。小熊明よ陳謝をく。傳三頗る口ごもる時よ。有
司傳三が妻ふ問けるハ。此銀弁よ袋等汝が物たる事。正數驗ありや。玉
笛がいふ。銀ハ元より三百兩。今減ずたる事と知らぬ。袋乃切ハ正をく證
あり。妾が父れ服の殘れる絹よく數しさる袋なり。其服と御見合下さる

べしといへば。則ち其服を引合せ見るに。横縞條理少しも違はず。爰に於て小熊隆閑は。面を変じて辭屈し。遂に刑罰に行はれ。斯て藤太夫夫婦と始め。善内・文内・傳三が宅に集り。傳三が孝心。玉笛が貞節と感ず。藤太夫がいふ。文内殿は志しこゝろ甚深切なれ。其恵まあそ。兩人が孝も貞も全せり。我家多く貨財を貯ふといへども。更に此心なし。實に文内殿は仰志しに恥入る所へ。孝子貞婦の産業と誅るべしとて。金子三百兩を出して傳三に與ふ。傳三辭して請ず。藤太夫頻りに是を勸めければ。傳三がいふ。然らば御芳志の代りに。母を返し給はるべし。我存念は。孝心と盡し。母乃餘斗を樂むべし。是廣大乃御恵みなりといふ。藤太夫聞て。尤殊勝の志しなり。先汝が母に問べしといふ。母がいふ。已は熟々思ふに。再び嫁をるは身を終る迄。再夫に仕へきに。殊に我懐孕れ身へ。今五ケ月ばかりぬ。妾が心是を判斷しがたし。藤太夫がいふ。然らば我妻も急に傳三が家に歸り。母子乃慈孝を盡すべし。亦出産せば。撫育去て。成長乃後に我方へ返さるべし。我先妻を以て母とすべし。汝も夫あり。我も先妻あり。若其方我家に留る時は。傳三に母なし。汝が前夫妻なし天は照覽恐るべし。扨向に傳三に金と與るに辭去て受ず。今汝に是を與ふるに。是二年が間夫婦と成たる表しにとて。送り遣る。夫より一類彌平に親しみ深く交りと結び合る。此事世上に普く流布し。上聞に達し。甚だ甚だ感賞まし〳〵。録乃物と賜りて。其家は戸役を免しけるとかや。

君子乃いふ。傳三が孝心。玉笛が貞節。善内が義心。藤太夫及び其妻は志操拔立つる事。實に感歎するに絶たり。然れ共。孝子貞婦も如此危難に逢ひ。其身必死に臨といへ共。天道乃冥助と蒙り。其難難を解

脱もる事。誠に孝子貞婦乃其徳行に依れば。書曰昊天無親。唯徳唯輔。といへるも宜哉。

○源渡が妻袈裟

左衛門尉渡が妻を。衣川れ娘。其生質。世に類ひなく美ゑく。皆人心と通ゑり。衣川の子おれば。とて。袈裟御前ともいひける。ならひの里に。左衛門尉源渡といふもの。一門へければ。内外につけ〳〵出入ければ。娘と頼みていひなれば。恥かしらぬ事へとて。妻となし〳〵るに斯く三年と重ねて。女房い十六になりぬ。其年れ三月中旬。渡邊の橋供養あり。遠藤武者盛遠。生年十七歳。其日れ奉行たり。供養をみ諸人皆下向する中に。十六七斗の女郎。輿に乗らんとて。簾打明てけるに。世に有がたき女ゑ。盛遠目くれ心消へて輿につきて行程に。おらひの里の渡が家に

うたり聞及び。衣川が娘ならん。夫より春の末つかたより秋れ半迄病に臥し。葉〻煩ひ〻るが。心と極め。母れ許へ行て刀と抜。母れ胸に差當。云けるい。我爲にい伯母おれども敵へ。袈裟御前を渡に嫁せしめ。これ獨り慈路に迷ひ。此事思ひ積る心より。命も消へ失んとは。是こそ伯母の甥を殺すといふれおり。生〻物思ふも苦しなれば。敵と共に死んと思ふへ。衣川は魂も身に添いも。狀夫程に思ふとい知で。渡邊が奪ひとりて歸れり。如何せん我是を斗らんとて。娘の方へ人と遣ハし呼寄。盛遠が有様試語り泪を流し〳〵る。娘は是と聞て心おき事に思ひしが。親乃爲にい。いか成孝養とももるものゑ。夫の爲にい命にも替るい。女れ道おりと思ひ。母と慰め。則ち盛遠を呼ていふ様い。君淺のらを我身と思ひ給ふおらば。左衛門尉を殺し給へ。豆に心安く契り申べし。左も思ひ給いぞ。自からも謀事と語

るべし。盛遠限りなく悦び其謀を問ふ。女のいふ樣ね。妾かへりて左衛門尉ゟ髮を洗ゝせ。酒ふ醉せ〻卧せ〻ね。東枕して。窓の下ゟ髮のぬれたると。卯ふ討給へ。盛遠許諾ゑ〻歸り女房ね家ゟ歸りて。夫れ渡ゟ酒と勸ゑ醉卧さるを。帳臺乃與ゟかき入。自ら髮と濡し。烏帽子と側ゟ置〻。卧せり。夜半比ふ盛遠忍び入て。探り求るふ。濡さる髮ありしと。唯一刀ゟ首を斬り袖ゟ包み。家ゟ返り〻見れば。女れ首かり。盛遠大ゟ驚き。其首拭いさぎき。夫れ命ふ代り々るよと。悲歎れ泪ゟ卧沈みしが。又思ひ直し。直ゟ渡が家ゟ行き〻。始終の趣きを語り。今我首と討給へ。緊や殘念ふ思すらんと。押斗り〻推參せり渡も泪ゟ暮々るが。是も又前世れ宿因おらんと盛遠が罪と赦し。髮と切りて發心を。盛遠も共ふ僧となりて。女の後世を弔ひ々る。是則高雄文學上人なり。鳥羽の戀塚ゑ(山城國紀伊郡下鳥羽)此女れ首を埋し處なり。文學常ゟ此處ふ來〻經と讀念佛せり。今ゟ皆人爰ふ來り〻涙泣を催せり

語曰。忠臣不二事二君。一貞女不レ見二兩夫。一蓋貞義れ謂おり。其志操れ節おる事。千載れ下ふ於て。感歎せり。劉氏が烈女傳ふ。京師れ節女を載さり能貞義女れ事ゟ符合せり其節義れ相同事。和漢一轍おる事。以て見るべし。

○土肥實平が妻

土肥次郎實平が妻ゑ。其生れ付。才智勝れて。慈悲深く。家僕等ゟ敬憐となせしゟより男女皆共ふ忠節を思ひて。躾ゟせゑ。實平折ゟふれ。物荒紀行ひあれば。常ゟ諫めて家よく治れり。然るふ兵衛佐頼朝。義兵と揚られし時より。是ふ組ゑ〻忠節を盡し〻り。初め兵衛佐れ大事と企られ

し貯實平は兩端を持ちて孤城を生じ祭り煩ひなると此妻諫めく申けるは。夫東國は皆是源氏ろ御家人おらもといふ事おし。時勢ろ任する習ひなれバおそ。一旦平家ろ從ふ謀おそ幸ひなり。今源氏は大將既ろ時を得て旗を上げ給ふろ。平家はおごりを極め人望ろ背く。佐殿は其人とおり。威ありて猛からを籌策あり〳〵大功と遂げ給ふべしと申せーうバ。實平大きふ感じく。其子遠平と共ろ佐殿ふ參りぬ。斯て佐殿は大場。椙原と戰ひく敗軍ちく土肥乃杉山ふ隱ま給へバ。粮つきく飢ろ望み給へり。土肥實平が妻は其等を一人髮とそらせて。僧乃姿ろ出立せて。あーうれ中へ食粮と入れて其上ろは青き樒とおくひ。閼伽の水は桶乃中へ酒を入く行人法師は花摘よーふえておし。恐び〳〵ろ送りタれバ。杉山と取圍みける賊兵も見咎る事なし。こ乃故ろ佐殿命恙なく隙と伺ひ杉山と出て走り給へバ。土肥が妻は文認めて。三浦畠山は軍は樣を細々と書記し。安房上總の方へ。三浦は一門下りー事迄。申越たり。伊東入道が土肥の村里を燒拂ひけるが實平が所緣ろつ紀て。真鶴（當時鶴前と云ふ）は遂に隱れ居さり。幾程もなく空敷なりぬ。佐殿は此文と見給ひて。計策と廻らー。安房上總を服せーめ。大軍となり。遂ろ平家と亡ぼし給ひタり。

佞國新女鑑ろ或記に曰。實平が妻は安藝乃嚴嶋乃内侍ろて。初清盛が寵を得く女子を產。其後白川院の更衣とおりたが。越中前司盛俊が妻となりーといへり。此記非おり。源頼朝石橋山の戰ひに敗北ー給ひ。杉山に隱ま一に。此妻密に食粮と送る事あり。盛俊の戰死は一の谷へ。前後大ひふ齟齬せり。因く其妄說成事と知ま。此說是おり。此妻は智謀出群かる事は實平が兩端を持ちく決せざる時。妻勝

敗の是非を論じて決斷し。賢平と云へ功名を遂さしめ。頼朝の覇業を
おさしむるに至りぬ。此妻も亦勉力あり。誠に閨中れ秀ある哉。

女訓 皇朝烈女傳卷之上終

女訓 皇朝烈女傳卷之下

菅丘源鬱岳撰

○妓王妓女佛女妓或は秡る作る佛女と佛前に作る

妓王妓女は。江州野須郡中須の産へ。母と刀爾といへり。妓王は。入道相國清盛の寵愛を得事。他に異なり。月毎に百石百貫を母へ與へり。寵愛を得る事。三年なりしに。加賀より佛女といふ。白拍子来りて。清歌妙舞。人をお是と歎賞ぼ。佛女のいへるは。天下れ人の耳目を悦ぼとも。本意なし。願くは相國乃高覽に備へんとて。西八條殿に来りて。鄙技を奏せん事を願ふ。相國大に怒り。神とも佛ともいへ。妓王が有んを處には叶ふま

ゞき由。宣ひしゝ。妓王勸め奉りしね。遊者乃推參ね。常の習ひなり。つゝおく返さん事。無や本意おく思ふら免。御目見斗りね。何歟苦しかるゝまじ。相國則呼返さしめ。今樣一指このまゝける「君を始めて見奉るときね千代も經ぬべし姫小松おまへの池なる亀岡ゝ鶴こそ群あそぶ」。と三遍唄ふ。相國興ゝ乘ゞ。今ひとさしと。望まれけゝば。其妙なる有樣ゝ。相國。茫然とし。戀慕ゝ。頻りゝ留給ひけれども。辭し〻歸らんとする故。相國ね。妓王が所りしこそ。彼ゝね歸らんとは。忽ち妓王と追退んと宣ひしが佛女頻りゝ是と留むれども。相國の怒り解やらず。遂ゝ妓王と追ゝらねしむ。妓王ね泣々出んとせしが。一首れ歌と書殘しけり。

ゑへ出るゑ枯るゝも同し野邊れ艸何ゝら秋に逢でゑつ祇妃

と詠して。我家へ歸て。泣臥し〻。人ゝも逢ざりしが。其後相國より招ゝ

ゝ共。妓王ね唯悲しみて。御返事ふも及ばざりしが。相國重〻使して。招け共來らず。淨海も斗ふ吉ありと。宣ひ々る。女の刀爾驚て。泣々諭し々ゝ共。妓王ね固く辭し〻いふ參らざば。斗ふ吉ありとの仰おれば。定て都の外へ移さゝんゝ。又ね一命ゝ及ばんゝ。此二つふね過べゝらず。是妾が覺悟の前おれば。再び辱しめを榮るも心うき事。女のいふ今天下ふ住者ね。相國の命を背くものおし。夫男女の情ね。千年れ契りも永き別ゝ逢も何り。又白地ふ思へども。おがゝへゝづるも何り。世ふ定めおきものね。男女の道おり。今御吉ゝ違へば。定て都の外へも追れおん。汝等は年も若々れば。いゝおゝん。岩木の橋ふも。年月と送らんゝ。自ゝらね年老ぬれば。鄙の住居。心うし〻。只都ふて老朽んこそ願ひおれ。此上の孝養ゝ。此度の御受拔願ふまでぞゝし。妓王も母れ。志しふ忍ひゝして。八條殿へこそ參り

々れむ始の所へハ入られを遥ふ隔置れける妓王ハ心うき事ヨ思ひける。相國ハ出給ひ佛女がつまくゝと歴めん爲ヨ招きたり。うさひ舞ーく興を催ほべし。妓王ハ泣々「佛もむゝしハ凡夫ゝ我等も終ヨハ佛ゝいづまも佛生てをる身を隔つるのみこそ悲しけれ」とぞ歌ふさり皆人感涙を催ー々る。相國も何れふ思れれける歟座を立て入り給ふ。妓王ハ我家へ歸り。妹ヨ向ひ母の仰れもだーがさけれべ。恥を忍ひて再さび辱めと請る事の悲ーさよ。只身を水底ヨ投んより外をおし。妹も共ヨ死んとせーが。母ハ泪と流ーて。ふさりの娘を殺し。年老さるが殘りて何乃樂みをらん共ヨ死より外おし。然まども死期の來らぬ。母を殺ほ事ハ。五逆罪ふくやをらん。此世斗りのもろおまべ。背もおヨ歟。苦ーうらん。共ヨ後世を願ヨん やと進めけれべ。妓王も是ヨ感ひと開き。妓王ハ廿一。妓女ハ十九。母ハ四

十五ヨて尼とおり。嵯峨の奥山ふ柴の庵を結ひて。念佛ーく居さりしが。春過ぎ夏たけて。秋の夜の物淋しき竹の伍み戸を打くもの伍り誰おらんと思ひーふ。佛女ヨて有りー故。大ヨ驚ひて。先内へ入ふ々る。佛女ハ十七ふく尼とおり。いひ々るを元より。我身ハ推參のもれおるふ。君の御勸めヨ寄りて。御寵愛と請し。身のいひ甲斐おく。心ヨ任せざりしふ。八條殿の宮中と出給ふ。時の御詠歌ヨも。我身の上おらんと思ひ合せしヨ。其後君の御ありかも知まざりしヨ。今此處ヨおヨほよしを聞々ば。羨まーく存ぜるが。世の中乃榮花ハ夢れもめ。樂み榮へても何ヨせん。人の身ハ請がさく。佛教ふハ逢がさし。只一向ふ後世と願ハんとて。浮世の塵を出て。漸爰ヨで來り。只今迄の罪科も。宥し給ふべーと。涙ふ咽びーふ。妓王も其志ーの切おるふ感ど。夫より四人一所ヨ籠り居て朝夕佛前ふ向ひ。香花を備へ皆

往生の素懷と遂まゝる。後白川法皇の長こふ堂の過去帳まゝ。妓王妓女刀爾佛女等が尊靈と四人一處まゝ入られさりといふ。

伊藤長胤が醫軒小錄まゝ云。妓王ハ江州野須郡中須の産ゝ。其村灌漑の利少おさまゝ寄り妓王ハ清盛まゝ乞て。堰と築き。溝を堀。水の懸りの便利を得たり。其堰今まゝ殘り。野須川を決ゝ。三里程の間水と取りて。三村の潤とおる。一日の間まゝ成就するといひ傳ふ寺を。妓王妓女伏追善ほ。其所の耆老おどハ。妓王が忌日まハ精進ほといへり。賤婦の身ふても渡世まゝ利澤と殘せり。蘇了現と云名齊ゝく。西施の紗石ふも勝るおらんといへり。妓王が人物思ふべし。因て考に備ふ。按るまゝ二子ハ。白拍子なれども。其志操の高潔成事。感歎するふ。猶余り何ゝ。妓王が寵衰へ。宮中を去る時。詠歌ふ發せるも。其意深切悃情おる事。

誰ゝ哀を催さぞらん哉。漢の班婕妤が飛燕眼儀の進めるを見て。愛の衰ふると察し。長信宮まゝ奉侍せん事と願ふて。秋扇の詩と作りて。悲愁の情と述さるも。妓王が詠歌れ意と相映發ゝ。人情と動せゝむ。又佛女ハ妓王よりも。其志操ハ尤超越するよふまゝ思ゝる。妓王ハ寵愛衰へて。悲愁の情も詠歌ふ發せるも理りおらし。佛女ハ相國の寵愛盛んおるまゝ。妓王が詠歌の意まゝ感じて。忽ち貴寵を脫遁する事。弊さる履と棄るが如く宮中と去ゝ尼と成。浮屠まゝ仕ふる事。おとさりの者まゝあらぞ。其貞操の清潔おる事。娼妓の類まハ稱へ。冥を以て觀ずるまゝ古ハ猶今當世妾婦の婉孌妖態を競ひ。寵を爭ひ奪ふも。一朝卒然とゝ變轉を事。巫山の雲雨まゝ共おらぞ。獨り入道相國を罪をべのらぞ。公門壹人多くハ奢侈驕慢の故態おる事以て知るべし。龍陽君が前炙と見て悲

哀せしも宜哉

○静女

平氏滅亡の後。九郎判官義經は。頼朝の嫌疑を蒙り。京師ゑ逃ゑ出て。奥州ゑ至らんと。吉野路ゑ趣き々るゑと。山僧等。蜂起しゝ討とらんとほ。義經は。危難と遁れんと。形容と變じて。吉野山中ゑ逃れ。静も是迄は從ひしが。此處ゑて離別せらる。静は悲歎ゑ堪へゑ。藏王堂の邊りを。徘徊しゝ。ゑる找。吉野の執行等捕へて。北條時政ゑ献ゑ。時政鎌倉へ送り進せり。母の磯野禪師も從ひ行けり。頼朝は。筑後守俊兼。民部丞盛時とゝ義經の行衛を尋問しむ。静いふ樣は。吉野の山僧等。我君と討奉らんとせし故。我君は山伏ゑ姿ゑさゑとらへ。大峯へ逃れ入給へり。妾は一の鳥居ゑ下ゑ棄られたり。御跡と追奉らんとせしが。彼峯は女人禁制

ゑる故ゑ。泣々京都へ歸らんとせしゑ。惡僧が。妾が衣服財寶を盗みとりて逃失たれば。妾ゑ氣も魂ゑきへ失て。路ゑさゑよひしを捕へて。京師へ送らせし故ゑ。我君ゑ御行衛を知らざるゑりとて。只泪ゑ伏沈ゑり。因て安達利三郎ゑ預けらる。其後御臺政子。鶴ケ岡ゑ八幡宮へ詣ぜられ。近臣へ宣ふゑ。静女は。白拍子ゑて。今樣ゑ上手ゑりと聞及べり。此廻廊ゑゝ舞を催さしむべし。則使と以ゝ。請ぜらるゝ事頻なれば。静は悲歎ゑ伏て。因て辭退ゑ及べりといへども。使ゑ數再三ゑ及びて。いふ樣は。八幡神前ゑゝ奉幣ゑ擬せらるゝよし。請せゑれは。静も止事を得ぜして。舞曲をゑせり。工藤左衛門祐經は。鼓と打。畠山重忠は。銅拍子とゑせう

賤やゑづ賤がおだ巻繰かへし昔ゑ今ゑゑほよしもがな

吉野山こねの白雪ふみわけて入しあとは人はあとをこそしき

と詠じ給へば皆人感歎せり。頼朝怒りて。八幡宮は神前ふ。關東と祝ひ萬歳を唱ふべきぞ。義經は別れし事と悲愁して。詠歌とおすれ。甚不祥ぞ。罪科に行ふべし。政子泪を流し申をよふ。靜が心中おしはかりて哀れと催せり。君は伊豆にましはは時。深く馴染參らせしが。父時政は世の聞へを憚り。深く閉ぢ籠をしを。雨乃夜闇にともしをもせず。獨り涙にかき曇り。又石橋山の戰ひ破れて。君遁れ給ふて。御行方も知れざる時の如きを。身も世も何ちを魂と消し胸を冷し〻泣暮せり。今の靜が心の中。妾ら昔と思ひ合せ〻哀ぞ。思ひ内に何る時を言葉の外に淺るものおれば。願はくは哀憐垂給ひ。罪科を赦し給ふべし。頼朝も其言葉と感じ給ひ。卯の花重乃衣袂。靜に賜ひ〻れば靜は押いさぎよく歸り〻る。其後工藤祐經。梶原

景茂千葉常秀。八田朝重藤判官氏邦等。靜が旅宿に來り〻。酒宴を催ふし。興に乘じ〻。一指舞を請ふ。磯の禪師も共ふ。興とぞ添に〻る。梶原景茂醉に乘じ〻靜にたはむれ。戯情とおせり。靜は大に怒り〻。伊豫守殿は。鎌倉殿ふは御連枝ぞ。今御家人の身とし〻。妾にたはむれするは。甚以て不禮ぞ。我君の罪科と蒙り給ひざるべ妾ら汝等に言葉ともかはは事何るはじ。今かくの如きぞ。むづかしめと蒙る事や有るらんと。泣々いろり罵り〻り。梶原景茂は。大きに恥て退ぞき〻り。靜女は其比懐妊なりしが。文治二年の閏七月廿九日に。安々と男子を産り。頼朝是とき〻給ひて。其子女おらば。母に與ふべきぞ。男子ふては以來斗りがさし。只速やかに殺べしとて。安達新三郎に命じ給ふ。然るふ政子の方おきりふ。助命と請記しかども。頼朝少しもゆるし給はず。遂に由比が濱ふて殺し〻り。靜女

い悲哀まだへずして。八月十五日暇を乞ふ。政子の方衣服貨財等を給ひ。京都へ歸らしむ。後終る處とぞ。

室翁も靜女が貞操を深く稱歎していふ。艸も木もおびき從がふの威まおそるべし。いさゝかひふ屈せざして。始終心をたて。よつねふ叛らざしく。一生を送る事は。高節ふしく殉死せし輩ともおらべ稱すべし。京師の醇儒中村幽仏が撰びしとういふ。和漢貞烈の婦人を載し。姫鑑と題せし書まは。是をいひ殘しけるこそ遺憾なき。靜女は。元娼家ふ生れて。出處正しからざる故なるべし。夫はさる事なれども。名教を裨くる爲まは。是等とも捨ざるはゞきあり。詩曰采葑采菲無以下體と云り

○大磯の虎女或虎御前とゝいふ

虎女は。大磯の長者の娘。父は伏見大納言實元卿。實元罪ありて。吾妻まは流されし時。長者が娘まは契りて女子を産り。虎女と云。見目貌美敷。心ざまはゆふふしく。和歌の道まは思ひを寄。無双の遊君。十七の春乃比より。曽我十郎祐成とまりなく契りけるが。祐成元より貧なれば。其様見苦しかりゝと。虎女常まかなしみける。或時祐成大磯へ行きて。軒端ふ彳みて有りしが。頼朝の召まは應じて。近國の大名等美麗を飾り。打連通りしが。虎は遊君どもと物語りしまは。只今登る人まは。其國の誰々ぞといふ。先陣は横山の東馬正殿といへば。虎は聞て。誠ふ古き諺ふ耳まは樂を聞時は謹み。心の著時は。恣まをべらをといへり。思ふべき事まは有らねど。此人々の鞍馬鎧太刀刀を我まは呉よかしといふ。遊君等聞て合ぬ願ひ哉。何の用ふ歟。立べしと笑へり。虎がいふ。祐成どのへ參らせんと。

思ふ事とと斗りふて涙と浮べたり。遊君等思ふまさて何事やらんと怪みながら過ぬ。祐成敵討て後まそこの事知りまゝる。祐成是拭開て。ゥ程深き情の有者まと立聞しゝると思まれてゐ恥らしとて。さらぬ体まて内まと入り。むつまじく語りけて。其後建久四年鎌倉殿富士の御狩の時。曽我兄弟親の敵工藤祐經と討て。其夜十郎も討れさりと聞て。虎ゐ尼と成て。夫より曽我の故郷にゆき。兄弟の母まと對面しゝ。箱根まと登りて。別當まと逢。佛事と營み歸るさまと。兄弟のうさまし處と見廻りて。

浮世ぞと思ひ染ふし墨衣今まさ露乃何と置らん

と打詠べて。又大磯へ立かへり。高麗山れ與まと柴れ庵と結びて行ひすはしゝ。往生遂しなて。

妓王。妓女。静女。虎女ゐ。皆賤妃ものなれ共。其貞操の高潔ある事稱

をべし。高貴の夫人等の中へ並べ舉る事憚りあるふ似たれ共。其貞操ふ至りてゐ。貴賤高下の差別ふ妃様まと思ひる。因て高妃貴妾の中へ並べて。其貞操を知らしめ。以て婦徳と養ふの一助ともおらん哉

○和泉三郎忠衡の妻

和泉三郎忠衡が妻ゐ。佐藤庄司が娘ふて。忠信が妹ゐ。元暦中ふ。平家を亡し。義經の戰功高しといへどを。頼朝の勘氣と蒙り。奥州ふ下り。秀衡を頼みて。高舘の城まと居まり。秀衡年九十まて死せんとをる時。泰衡兄弟五人と招て曰く。我死せむ。頼朝此國を從へんとをべし。然らば義經と大將と仰ぎ。白川ふ關を居へゝ。防戰せば何年攻るといへ共。落城をべ妃ふ何らを。義經まと叛らば汝等頼朝乃履と取べし。此事かさく相守り心まと忘るべからをとて。空敷おれり。頼朝果しゝ。兄弟五人ふ義經と討べ妃御

教書拭賜ひぬ。兄弟五人相議して義經に叛らんとも、三郎忠衡進み出て此事夢々あるべからぬ。一度主君と仰ぎ、且先君れ御遺言猶耳に殘り。不忠不義の企ゐ。國家滅亡の端へ。只一向ゐ御遺言に從べし。四人乃もれゐ義經拭討て。鎌倉の恩賞ゐ預らんといふ。忠衡然らば。不忠不義のもれゐ。兄弟迚も何らせん。只今より敵ゐると座を立歸る。家衡相議して。先忠衡と討べし。其後義經をも。心安く討べきゐりと。三千余騎ゐて。平泉へ押寄さり。忠衡ゐ寡兵ゐて防戦すれども。大軍に敵しがさく。郎等も落失て。終ゐ廿七騎にて防戦して夕るが。悉く戦死ぬ。忠衡妻ゐ向て。何方へゑ落べしといふ。妻ゐ妾も命生て。何らせん。君れ爲忠と盡し。節拭守りて死せんと思ふゐりと。則鎧拭着し。夫と共ゐ出んとせしが。夫に向ひ二人の子と殘し。人手に懸んより死とともゐさせん。其後心よく討死せん。忠衡聞ていしくも申されたる哉。さらばとて。二人の子を刺殺泪を流して。只茫然たり。敵近く責入りしらば。今ゐ心に懸る事ゐしと。夫婦共ゐ敵中へ突て入り。縱横に奮戦すれば。敵少し退く時ゐ城中へ引入り。火と懸て。夫婦とゑゐ自殺ぬ。人みゐ感歎せり。

忠衡ゐ父の遺訓と守りて。不義に與せず。夫婦共。其節と潔くして死ぬ。誠に忠孝兩ゐがら全くして。芳名も千載の下に炳焉たり。古語に義者爲二存亡一不レ改レ志といへるゐ宜哉。

○松下禪尼

北條相摸守時頼の母ゐ。松下の禪尼といふ。時頼天下の執權と成ければ。尼公れ方へ招待るゐ。禪尼ゐ手自ら煤げさる明り障子の破損と。切廻して。張替られ夕るゐ。城之助義景歸りて申夕るゐ。所ゐだらゐ。見苦

しく候はん。誰までも仰付らるて皆張替給はんふおそれいとまなる。尼公も後にを。いろよふとも今日斗りは。態と斯くあるべきおり。總く物は破るたる所斗りと修理して。用ゐる事ぞと。若き人まに見習はせく。心付んため。こ既ふ天下を治るも。左の如く總くの事少しき内ふ手を入制し補ふひむ。大破まおり。天下の亂乃端と成るこ。今日時頼まこの理と示さん爲に斯は斗ふおそと。宣ひなまば。義景も舌巻きく。感じたり。女性おまま共。能聖人の心ふ叶ひし教へ。

按るふ。吾國賢婦多しと云へ共。其言行聖賢れ教まに符合をるは稀へ。魯の公文伯が母の敬姜が。紡績せられしふ文伯是を諫む。敬姜がいひしは。驕奢は惰慢より起り。家を亡す道理へとく。教諭せらましも。此裨尼ふ能似さり。北條氏皇朝の陪臣と以く。天下の權を取る。時頼時宗迄遺訓を守り。數代の安きを得る事。皆泰時及び裨尼の餘澤おらん。詩まに曰。既明且哲以保二其身一。又曰。不レ愆不レ忘率由二舊章一。謂レ之乎。

○楠帯刀の母

楠正成れ妻は。夫まに類する習ひおれ共。才略貞操類ひ稀なる婦人へ。正成兵庫湊川まに於く。此度の軍まに戰死れと思ひれなる故。子息帯刀時まに十一才まに成ると。櫻井の宿へ招きて。種々教訓せらまし。故郷へ歸さる。其後正成戰死せられなると。尊氏より。其首を故郷へ送りさまば。妻子を始め。一族郎等も是を見て。判官の兵庫へ趣き給ひし時。さはく申置れさる事ども。今度の合戰まに討死をべしと。思ひ究めし故おまば。無く思ひ設けし事なれども。皆人々悲歎の涙まに咽びけり。帯刀は父が面影の變まる有様。母

の泪れ詮のさおきを見て流るゝ泪と袖ゝ押へて。持佛堂の方へ行けると。母い怪んで伺ひ見れば。父がかさみゝ留置し。菊水の刀抜持袴の腰おし下て。自害せんとすると。母走り寄りて。正行ゝ抱起付。泪と共ゝ申々るい。栴檀ゝ二葉より香ばしく。ひんうれ鳥いかひこの内より。諸鳥ゝ勝るといへり。汝幼くとも父の子おらば。是程の利ゝを迷ふまじ。子心ゝも能々事の様ゝ思ふて見よゝし。故判官殿。兵庫へ向いゝ出し時。汝ゝ櫻井より歸し留められさるい。後とともらふ爲ゝもあらず。腹と切ゝといふ事ゝもあらむ。正成運命盡て。打死をとも 主上い何方ゝてもおゝしゆをと聞ば。死残りさる。一族郎等を扶持し置。一戰に敵と亡して。再度主上を御代ゝ出し參らせよと。遺言せしを聞く。母にも語りしゑのいつゝ。いゝの頃ゝ忘ゝさるや。父が名を失ひ君の御用ゝも立べゝらぬと。教訓しく。刀と奪ひ取れば。正行い泣倒れ。母ゝ向く平伏ゝ。夫より正行い父が遺言母の教訓の心魂ゝ徹しく。膳ゝ銘し。唯一向ゝ朝敵を討亡を、工夫より外。他事ゝ。母も甲斐〳〵敷撫育しく。一族郎等ゝも慈愛深く。扶助等心の丈とあせしゝば。士卒心を合せ。遂ゝ正行旗と上げ出張し。朝敵を攻雛々。父が武略ゝ劣らぬ、再び名と大ゝ振へり。此母の教諭ゝよれば。詩曰有。學德行。四國順之。此母の謂へ。父子共ゝ忠孝を全せり。

○那須五郎が母

足利右衛門佐直冬朝臣。東寺ゝ籠らゝしゝ。將軍尊氏是を攻んと。京部ゝ兵を出さゝしが。良もすれば。將軍方敗北ゝ及んとを。將軍よりい那須五郎い勝れく。智勇のえれゝ是ばとく。武田小笠原を替られく。敵陣ゝ臨みゝる。那須五郎い。此度の合戰心元おく覺へゝれば。故郷れ老母へ

人と下〻曰、此度の合戰は若討死せむ。親は先立身とおり。草れ蔭若の下迄も母の歎を給はんと見奉らん事思ひやられ悲しく候と申々は母も泣々返事書て送りなるは。古より今に至る迄。武士の家に生るゝは名を惜みて命を惜まず。義を守りて忠を尽らとを。皆是父母の別を悲しみ妻子に名殘を念ふといへ共。家の爲世の爲。朝りと恥るが故に。惜らるべ紀命を塵芥の如く捨るゝ。夫身体髮膚を父母は受け。敢てうこをひ破らをと歎爲は孝の道あり。今又身を立道を行ひ。名を後世は舉るは。孝の終り成るべし。此度の合戰はかゝへて身命を輕くして。先祖の名を失ふ事ならは。是は元暦の比那須與市宗高八嶋の戰ひのを紀扇を射て。名を揚さる時の袍衣なりとて。薄紅ひの母衣を錦の袋は入て贈りなり。五郎は老母の教訓は。いよ〳〵義を勵まし〻る所は將軍より使を以て。此陣の戰ひ難儀は及ぶ。恥むらふて敵は破るべしとあり〻る。五郎今生の本望なりとて。敵將修理太夫高綱の兵と奮戰し〻兄弟三人一族郎等廿六騎一足も退らを。潔く戰死を遂さる。

○瓜生判官が母

瓜生判官保。其弟兵庫助重弾正左衛門照。義鑑房は。宮方はおり宇都宮美濃將監と心を合せて。新田式部太輔義治を大將と〻く。旗を揚越前湯は尾の峠は關は居。城を築き。三百余騎は て籠る。其後駿河守と合戰し敗北を。里見伊賀守。瓜生判官。義鑑房等五十三人戰死して。殘るは山の城へ逃は来る。判官の母は少しも悲める。氣色もなく大將義治の前は出て。此度人々は不覺故は。里見殿と討せ參らせさは左こそ惜と思召をらめ。但し是とをなから。我子は判官兄弟何は も命生

く歸り參りさらば。いろは一入。我身の上はうさてさも。やるりたかるべ
紀は判官伯父甥三人のもろ里見殿の御供中。殘る三人の者は大將の
御爲ゆ生殘りたりしを。歎きの中の悦ひとこそ覺へたれ。元是君の御爲
に思ひ立ぬる。此一大事おれば百千の甥子と討るゝとも。少も歎べき事か
らぞといひて。自ら酌と取て。一盃を進め奉るは。軍勢等節義と感じて色
と直しなるとかり。

那須瓜生の二母は。忠義の爲に能其愛者執は引捨て。義と進めて戰
死を遂しむ。悲哀は絶ざるを能く忍んで。諸軍卒の勇氣と勵まし。悲哀
の情押て察すべし。所謂義者は身と殺しく。名と成といふかるべし。

○奈良左近妹

左良左近義成が妹は。容貌うるはしく。歌道はも達しなる。左近は笛を

好めり。其頃京の西岡は定光久右衛門尉とて。笛の上手のありしは。是
ゆ依て稽古せしが。定光は左近の妹を見て。限りなくめてはとひ。左近に
云けるは。御妹と我ゆ得させ給はゝ。我妻を去りて。末久數語らひ遂べし。
是我生涯の願ひ。左近は心ゆ。是を憎みなれど。打笑ひて過ぬ。左近は
師弟おもゆ。禮を亂さぬ笛を習ひなるが。永錄十二年正月。公方義照公
を信長補翼しく。本國寺ゆ假りゆ住居せらるしゆ。三好山城守。同下
野守入道長閑齋等。五千余騎ゆて。本國寺ゆ押よせさり。公方ゆは寡
兵さりしが。三好左京太夫義次等馳來り。防戰しなる故。寄手敗北せ
しが。奈良左近は。寺の橋詰はく。能き武者と討取なるべ。敗軍と共は引
退く。定光久右衛門後より追りけ。只今落行は。奈良左近はていおは
歟。はさのふも後と見をるえのゆ取。返せ〳〵と呼とりなるべ。左近は師弟

おゐ共。引返すと。十騎斗りゐて。取囲んで放つ矢。左近が首ゐ中り〳〵倒ゐしを。定光走り寄り々ゐべ。左近伏おがら刀を抜て脛と薙々れべ。退く處を。樋口三蔵入らゐり左近の首打取る。夫より定光い左近が伏見の家ゐ行きて妹を。取もれゐ〳〵歸り々り。女を兄の敵へ。餐を報ひんと思ひ定光ゐ向ひ〳〵云々るゐ。妾此頃野村越中守ゐ約束せしが。兄と一所ゐ討れたるよし伝きく。此上い頼む甲斐なき身なれべ。只此後い。御世話と願ふのみへと云々ゐべ。定光大ふ悦びける。女のいふ故郷の母へ文遣し度よし伝乞ふ〳〵。鬢の髪を切ふみふまき添けり。定光則ち此ふみと伏見へ送り々り。母此文と披き見ゐむ。哀ゐおる事ども書つゞ々て。更ふ野村ふ約せしおれども。是えうさゐ給ひ。亦兄上ふも討死ふて。只母上と殘し〳〵。先立べきえのおもひ。悲ふ堪へざる思ひのあり様と。細々と書て與ふ。

思ひ川深き淵瀬をたゆ々れど誘引ふ水ふを河を流ゐ

母是を見て。限りおくかおしみて。使の見る處ふ〳〵自殺せり。使い大ゐ驚き〳〵走り歸る。定光い何心おく。只悦ひて女房の側へより。たゐむれ々るとゐ女房飛懸ゐて。定光が刀と奪ひとり〳〵抜打ゐ首打落し。兄の敵夫の義理も立さり。心ゐ懸る事おしと云〳〵。其刀ゐて自害とぞ志さり々り。世の人是を稱し〳〵夫ふ貞あり。兄ゐ弟あり。母ゐ孝行て。定光を殺せし事。誠ふ烈女ありといふ。信長此事を聞て。定光い不義のえれなり末代迄のこらしえゐせよと妻子迄。磔ゐ行ゐゐ々るとゐ。

○鳥井與七郎が妻

鳥井與七郎が妻い河井安藝守が娘おり。嫁してより半年程過々るゐ。越前の朝倉義景と。織田信長と合戦ゐ及べり。淡見對馬守心變り〳〵

て。越前勢敗北ふ及べり。馬井與七郎を初三十余騎戰死は朝倉式部太輔ゐ。主君義景と討て。稻葉伊豫守ふ降り狀乞ふ。馬井兵庫助。(與七郎れ父なり)刀根山まて。其子與七郎が死と聞て。斯ゆ思ひつらゆ々哉。

さき立ーおむ紀が花れ朝風や殘るさへされ露哉ふらん

と詠ぢ々る。母ゐ餘りまは悲哀まは絶も。其日まは俄ふ空數おれり。兵庫助ゐ。高橋甚三郎と同ぢく。義景れ爲ふ殉死して。報恩をおせり。然るまは與七郎が妻ゐ年乃比十七八ふて。みめらさち世まは勝もしらべ。山田乃城まは信長の軍兵等入亂もは亂坊の折らとりものまーく來る。藁屋のすが弦の上まは走へお紀。軍兵たもむれ々る。此妻泪と流していふ樣ゐ。妾が父上も。夫も刀根山まて討も給ひ。母上も姉君もちりぐまあり給ひて。自からが事いらまは祭ぢ給ふらを。願ゐくを。硯の石らべかし給ゐも。其上御らさへ露の命の斯る石り樣と風の便りまは傳へ送らんまは。届け給ゐぢ。此上もな紀御恩ならめ。其後ゐ仰ふ隨がひ申べしと。則ち矢立ふ紙を添へて與へ々もゐ。筆を染て。文ら紀終り。是と届け給ゐれといひ捨て。側なる井ふ。身と投いもて。死ーさりゆる。軍卒大まは驚紀々もども。すべ紀よふなく。文と披紀見もべ。

世と經おむなき浮雲とおふひおんいざ入ーはー山の端乃つ紀

誠まは石らゆおき。武士も皆々哀れ紀催ー泪と流し。野邊の送りともいとおみ々利。

○武田勝頼の夫人

武田勝頼の夫人ゐ。北條氏康の娘ゑ。天正十年三月。織田信長大軍まは。甲陽と攻破り。武田の舊臣甘利左衛門と始とーく。勝頼まは叛き々もゐ。勝頼只百騎斗りふて落られ々る。夫人も漸く馬まのり。侍女ゐ草鞋まは

て逃れける。敵むや貴入りて火烟天と掩ひけるべ。勝頼ハ田野の奥。天目山へ入りけるが。秋山攝津守叛く。火砲と發し襲ひ来る故。鶴瀬の邊り田野といふ處ふ隠る。敵兵潮の涌くが如く責来る。勝頼ハ。秋山紀伊守と以て。夫人ヨ告ちまるるハ。武田の運命今日を限りと覺へちる。夫人ヨを幸ひ。小田原へも。道筋宜しけまべ。送り届け參らはべし。年北の情ヨハ。後の世と弔ひ給ハまま。又いうふらん便りふも身と寄給ひ。心易くすごし給ひと仰々まべ。夫人の宜ふハ。うさてき事と聞もの哉。同じ木陰ヨ宿り。ひとつ流を汲事も。他生の縁とうや申ふり。離て七年夫婦の契り淺からざるふ。今斯の如死危難ヨ逢て離別せらまま。小田原ふ歸り。いう成處ヨ身を寄るといふとも。妾が浮名ハ消なまじ。唯夫婦ハ死生を同ふすべしとて。許容し給ハを。老女ヨ語り給ふハ。此年月ハ子れふ死事と歎きて。神佛にも祈りしが。今ハ能こそふうりつまま。譬へ子ハふくとも。小田原ふく跡弔ひ給ふべしと。則故郷へ文を遣し給ふ。女の身ふまべとく。北條早雲より。代々弓矢の家ふ生まま。女ながらも。潔よく死せしヨ。又不甲斐ふき死せしと笑ひまんも恥ふし。妾ハ此所ヨく自害せしと申せとく。御ふみのうまハ死ふ髪を切ま死添く。

黒髪の亂またる世をうくしふ死思ひヨ契る露の玉乃緒

と詠しらまるる。然るふ敵軍亂れ入。一族郎等悉くうされ々まべ。夫人高聲ヨ念佛と數遍唱へられ。自殺せられく。衣引ちつぎ伏し給ふ。局も共ヨ殉死せり。勝頼も自殺せられ々れば。武田の一門悉く滅亡せり。

悲哉。此三婦人亂れたる世ふ生まま。流離艱難いふ斗りふし。猶是悲しむヨ絶さり。或人云。其志操伏變ど。いう成人ヨも從ひさらば。如此苦難

い。有はゞといへり。然れども身貞操と守り。無量の艱難に逢。身は死に臨むといへども。其操と變せず。誠に貞婦と稱しても可なる哉。詩曰 德音無違及爾 同死。蓋三女の謂なるべし。

女訓 皇朝烈女傳卷之下終

明治十七年一月廿八日版權免許
同 二 月 出 版

定價金五拾錢

東京麹町區
飯田町二丁目三番地
静岡縣士族
校正訓点者 中村賴治
無出版人

同區同町五拾番地
元販賣所 東京同益出版社
印

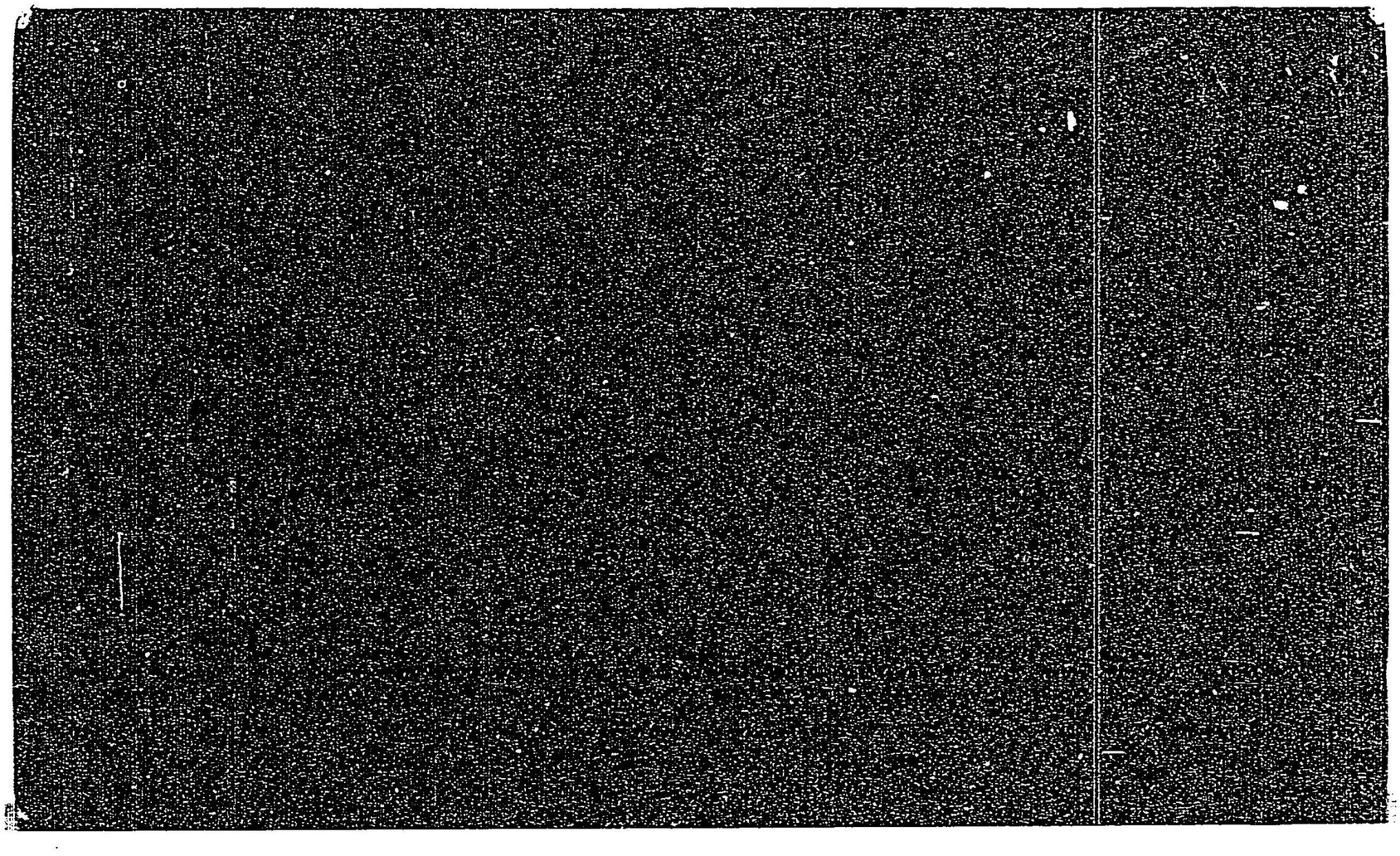
繡畫者 小林桂湖

東京販賣所

芝神明前三嶋町　和泉屋市兵衛室　町　渭　稻　堂
日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛　芝愛宕下町　春　陽　堂
銀　座　博　開　社　日本橋通一丁目　大倉孫兵衛
室　町　中　外　堂　南鍋町　兎　屋　書　店

大取次所

日本橋通三丁目　丸　善　書　店　通　塩　町　内藤傳右衛門
淺草茅町一丁目　須原屋伊八　馬喰町二丁目　森屋次兵衛
南傳馬町　東京科史出版社　神田雉子町　嚴　々　堂
飯田町三丁目　東京金玉出版社　兩國廣小路　松木德兵衛

各地賣捌所

陸奥仙臺　伊勢屋安右衛門　羽前山形　五十嵐太兵衛門
羽前鶴ヶ岡　地主文藏　上州前橋　黑崎長三郎
同　地主勢次同　嶋屋喜三郎
渡嶋函館　魁文社　常州土浦　武藤熊吉
信州善光寺　西澤喜太郎　信州小諸　相場七右衛門
羽後横手　下田彌兵衛　大坂　柳原喜兵衛
陸奥黑石　岡崎泰次郎　西京　出雲寺文次郎